むかで苔の住所、さゞいの洞に求たるも珍らし。

右はまた、能なし山のうどの大木、千とせを經たるも奇也。此山いづれの所にや。山海經にも見えず、もし无何有之鄉・廣莫の野につゞきたる名所か。彼大樗を捨ざるのためしもおもひ出られて、うどの大木、又愛すべし。

第八番

左

柚の花は香故に花と社いへれ花

右勝

都人山桝を藤の若葉とて

花柚のかほり盞に落て、いかなる上戸の袖の匂ひぞと、なつかしけれども、都人のみなれぬ木目、藤の若葉に見ちがへたる風流、優にやさし。

第九番

左

夕べかな雨杜鵑坐禪豆

右勝

麥飯やさらば葎の宿ならで

左の句、雨の夕べの淋しさをいはんとて、坐禪豆といひ、郭公に慰たるさま、興有てきこえ侍れども、葎の宿ならぬ麥飯こそ猶珍らしけれ。

第十番

左持

きり蓼の切れて己が命かな

右

夕影や色落すしその露おもみ

前栽國の傍にして蓼・紫蘇の二もと色をあらそふあり。先、左蓼の曰、我はこれ、色翠に位いやしきといへ共、人をして利根になさしむるの德あり。其上露命不レ貪、切れて己が命といふ所こそ命なれ。紫蘇答、我には天德をゆるして紫衣をなす。多くの梅法師の中に紫衣上人とあがめられ、又五臟に入て病を治し、庭に有ては色落すしその露おもげなる風情、青蓼の青キにまさらんやと云、論しばらくにしてやまず。

第十一番

左持

女とや茄子○はがくれに打かたぶける姿

右

山賤の垣ほのさゝげともよめるや

已が葉がくれに、打かたぶける茄子の君、むらさき式部が娘にや。わかむらさきのゆかりにや。いか成ものゝ妻となり、いづれの人のよめとやならん。なつかし。

右の句も又、山賤の垣ほにはへる青さゝげ人は來れども言傳もなし　とよめるは、古今集籠どのゝ下女のよみたるうた成べし。いづれかおかしく、いづれか哀ふかゝらん。

第十二番

左勝

五月雨のよそに○蕗のはながら蓮の池

右

天蓼の枝折○老たる猫にはあらね共

たえまなき五月雨のそら、庭上忽池邊の思ひをなすに、彼遍昭が　何かは蕗を蓮とあざむく　とよめる心もおかし。又齊の管仲またゝび山ゝに道をうしなひ、老たる猫を放て道しるべしたるも珍らしけれ共、只遍昭の詠に心ひかるゝ也けり。

第十三番

左勝

あへて此箒木のほろ〳〵と成て只

右

影うらむや毛虫○かりきかうれの溜水

左、箒木のほろ〳〵あへ、淡してやすし。

右の句はかりきかうれのたまり水に、いぶせき毛虫の影をはぢんも、興ありながら、あまりに趣向を求め、たくみ過たるやうに覺え侍るは僻耳にや。只箒木のやすらかなる方こそやすらかなれ。

第十四番

左

古そばやあかでも人に夏大根

右勝

朝顔の夏日蔭待間のとうふ哉

雫に濁るしぼり汁あかでも人に　とよめる古そば、めづらしからぬにはあらず。しかれ共松樹千年豆麩一日の榮と作れる、朝兒の詠尤興あり。

第十五番

左

里芋の長也○畠中の庄司とやらんは

右勝

薯は山をうばつて○金輪際に自然生

里芋、興有て實なし。右の山の薯、自然薯・蕷生の字用ひんこと、いかゞあるべきや。但シ自然石・自然木等の類にて、くるしかるまじきか。其上、五文字力ありて、一句もつよくきこえ侍るまゝ、右勝たるべし。

第十六番

左勝

茶僧月を見るに○梅干の影のごとくに來

右

亂酒の僧見よやゆべしの責を受ル

左の五文字、先珍重なるに、現に見えし梅ぼしの情、誠にかすか也。かの土大根を食したる昔も、此類成べしや。

右の句、破戒の僧をいましめて、未來柚べしのせめをうけ、焦熱の苦しみには、柚味噌の釜うけにも成べしやとおそろしく、唯茶數奇の僧こそ殊勝におぼえ侍れ。

第十七番

左勝

暮山の雨松茸のすご〳〵と獨リ

右

岩もる水木くらげの耳に空シク

しよぼ〳〵と降暮山の雨にぬれて、松茸のすご〳〵とたてるけしき、言葉の外に意味ふかし。右の句も一體なきにはあらざれ共、木くらげの耳にむなしく、岩もる水の雫さへ、聞もらし侍るにぞ。

第十八番

左勝

發句

だひ〳〵を蜜柑と金柑の笑て曰

右

水又栗○〻を清しといはんとすれば

橙を蜜柑・金かんの論は、作のうちに作有て、虛の中に實をふくめり。數句の中の秀逸、此句に於て莊周が心あらむ。尤玩味すべし。水復栗の句は、栗また水を清しと打返シたる心、よく云殘し侍れ共、こゝろ餘りて言葉たらずなどゝ、難ずる方も有べきや。只左の句ヲ以、類ひなき勝と定畢ぬ。

第十九番

左

賤が契は干瓢のむすびもとめず

右勝

かれ〳〵ナルやのべに多瓜の獨ぬる

ひさごがもとの賤が情、干瓢の結びもとめぬ仇なる契こそはかなけれ。されどもかんぴやうむくと云時は、六月の季に出たるを、秋の句に合せん事いかゞ。

右は又、うら枯わたる秋の野に、多瓜ばかりとり殘されて、ひとりねに打こけて、あじきなきさましたる見立、新敷感多し。

第二十番

左持

霰浪の音○昆布の笘屋の夜すがらやな

右

山寺の多納豆に四手うつやあらし

左の句、蝦夷松前のあたりに、昆布を以、笘屋を覆ふとかや、咄に聞傳たるを、時雨浪の音のさびしきまゝに、遥成さかひ迄、おもひ出たる哀ふかし。

右の句は納豆に四手うつ山寺の嵐、まことにさむき景氣をよく云のべたれば、兩句持にてさしおきぬ。

第二十一番

左勝

凩の風干葉は窓をうがつて去ル

右

霰やは芥子に牛房の埋木の

しづが軒端のほし葉さへ、凩の尋來て、おとするにやと茅屋の閑窓、おもひやるさへさぶし。牛房の埋木、花さくべしともおぼえず。

第二十二番

左勝

はづかしや根深の○老の黛も白根がちに

右

あけぼのや霜にかぶなの哀なる

あさつきのみどりうるはしく、韮の若葉のたをやかなるも、いつしかねぶかの白根がちなる白髪の、老女に見立たるも新し。

又霜下にしぼむかぶなの姿、けしきなきにはあらざれ共、根深の前のいにしへこそ猶なまめか

しけれ。

第二十三番

左勝

麩といふもの有○性水を好で氷に遊ぶ

右

氷筋(つらら)のごとしかんてんのかんは寒ィとよむ

麩ハ性ヲ註シ、カンテンハ文字ヲトク。増補献立抄ニ曰ク、麩ハ風味ノ切(カヘシ)、以(テ)酒(ヲ)煮、以(テ)油(ヲ)煎(イル)、則味(ヒ)愈厚シト云リ。此方賞翫タルベシ。

第二十四番

左持

大根生(イケ)る逆成(サカサマ)がおかしいとや人〳〵

右

雪の多菜男鍬ついて立りける

左の句、賤がわら屋の軒に、生たる大根にや、面白し〳〵。雪の中の田薗三徑うしなひたる体、又珍重。

第二十五番

左持

雪の竹子○今は鹽したが有ものを

右

臘月の青物○我常盤屋也とよばふ

晉(シン)の孟宗、雪の中の須田町は、尋問ざるやとおかし。

右はまた、臘月の青物に、四時不變の國をおもひよせたるも奇特。左右わかちなし。

詩は漢より魏にいたるまで四百餘年、詩人・才子・文體三たびかはるといへり。倭歌の風流、代々にあらたまり、俳諧年々に變じ、月々に新也。今こゝに青物の種々をあつめ、二十五番の句合となして、予に判をこふ。誠に句々たをやかに、作新敷、見るに幽也、思ふに玄也。是を今の風體といはんか。且是に名付て、常盤屋といふは、時を祝し代をほめての名なるべし。倩、神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は、麒麟につけて、これをはこばせ、鳳の卵は糠にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參、綠もふかく、唐のからしの紅なるも、今此江戸にもてつどひ、風、たうきびの朶(エダ)をならさず　雨、土生姜をうごかさねば、青物の作意時を得て、かいわり菜の二葉に、松茸の千とせを祈り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長くつたはれらば、そらまめをあふぎて、今此時をこひざらめかも冬瓜(カウクワ)

于レ時延寶八庚申季秋日　　華桃園

註。杉風の序は、芭蕉の俳諧論としては關係がないので省略した。

（常盤屋の句合、全文）

「三〇八」

續の原　　四季之句合

一番　落葉

左持　落つかぬ木葉にあたる雫かな　風水

右　落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ　松濤

左の句、景氣微細に心を付たり。

右、又山もあらはなる不二の詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中目に見えたる切字なし。五文字にて云殘したれば、きれ字を加へて見るべきにや。猶、分明ならざるを難じて、持に定侍るべきか。

二番　霜

左勝　親と子の霜夜をかこふ野馬かな　溪石

右　霜深し扇をかざすよるのふね　勇招

ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子をおもふ　とよみ給ひしこのうたに便して、野馬の子をいとふさませつ也。

右の句、さもあるべきながら、左の句、秀逸なればまけ侍らんかし。

三番　夜興

左持　我笠に月夜わするゝ夜興かな　コ齋

右　いづれ狸得失覺て犬もなし　文鱗

ひだりの句、茂み深く分入狩人の形容、いぶかしき處あり。

右の句も、すがたつよく、言葉もたくみに聞え侍れども、其得失、我もわきがたし。仍以持トス。

四番　枯野

左勝

松苗も枯野に目だつあらしかな　枳風

右

大橋を枯野にわたす入日哉　全峰

左の句、木枯の吹盡して、苗松のそよ〳〵とうごきたる風のやどり、めにたつべきもの也。寸松虹梁のすがたをふくみて、一句たけ高し。

右も又、枯野の風景見捨がたく侍れども、苗松の方や目に立侍らん。

五番　網代

左持

子を連て夜のあじろに簑せはし　心水

右

あじろ木のゆるぎやみぬる氷かな　不角

あじろの床に、子を連たる作意めづらかにしてやさし。

右又、あじろの杭の氷にとぢて、寒さいやましたるけしき、左右、感心わきがたし。

六番　石蘭

左勝

破れ葉のツハ(石蕗)に顔出す鵙かな　調柳

右

つは咲や誰が引すてし雪車(そり)の跡　立些

左の句、いたちとかいふものゝ、わが方を見おこせたると云けん、をの〳〵薄もおもひよせられて、おかしく侍るに、引捨し雪車の句意、しかときゝえず。仍以レ左爲(ス)レ勝(ト)。

七番　鴨

左勝

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し　嵐雪

右

鴨くはで菜を干枯す鹽屋かな　魚兒

すゞかもの聲ふり立る秀句かぎりなし。一句安らかにして、嚴寒のけしき盡たり。かの妹がりの哥を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと書けん、さることにや。

右の句も鸞を飼ものゝ、きぬ着ぬためしも、あはれに侍れども、鈴がものすゞの聲、句調たかしとやいはん。

八番　氷柱

左

風に來て氷柱(つら)にさがる楓かな　一排

右勝　門閉て閉居をしゆる氷柱哉　琴風

氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、ほそくからびて哀なるに、右はなほ烟り絶〳〵にして、葎の後は氷柱に門を閉たる閑居の扉、感情まさりたるやうに覺侍る。

九番　あられ

左持　あかつきの霰は多の信（マコト）かな　李下

右　森深く野馬飛こむあられかな　伸風

烈風寒威、曉の寢覺、多のまこと〻いへるぞ、かくてはよにもあられ降哉　と吟聲さびしきに、右は又、野馬のあられにおどろきたるさま、能（よく）云叶られたり。聞所、見る處、師曠が耳をそばたて、離婁が目のさやをはづすといふとも、左右の是非、辨ずることあたはじ。

十番　神樂

左勝　御神樂や火を燒（たく）衞士にあやからん　去來

右　鉢たゝきまじりて狂ふ神樂かな　孤屋

左りの句、させる難もなく、秀たる所も見えず。右は鉢たゝき、神樂に交るべき方いかゞ。右に難あるをもて、左がた勝たるべし。

十一番　頭巾

左勝　山里や頭巾とるべき人もなし　觀水（京）

右　頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな　龕言

めにふれぬ山中の客、そゞろに愛せらるゝ楓林もあるか。右は目に立て猶すごき多野の法師、人にはいかゞおもはるゝ心ばえもありなん。左まさるべし。

句

十二番　煤掃

左　何方に行てあそばん煤はらひ　擧白

右勝　煤とりて寺はめでたき佛かな　不卜

すゝはきの日の遊び處を佗たるも、優にして艶なり。

右は、寺の煤掃と思ひよりたる、先珍重にや。兩句、滑稽のまことをうしなはず。感心わきがたく侍れども、めでたき佛哉　といひし句のいきほひ、猶まさりて聞え侍れば爲レ勝。

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境にしたがひせまりて、志は雪ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となること年有。是より先も集あらはすこと、ふたゝびにおよぶといへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま〴〵に、唐朝の牡丹も花しべをことにす。梅のわび、さくらの興も、折にふれ時にたがへば、句も又人をおどろかしむ。なほ其しげき林に入て、花の香の清きにつき、色こき木葉をひろひて、左右にわかちて積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや樂にえらるゝものゝ、笛をぬすむに似たりといはん。されども青鷺の目をぬひ、鸚鵡の口を戸ざゝんことあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の潮にそゝぎて、終に蕉庵雪夜の燈火に對す。（續の原句合、冬の部全文。跋文の一部「個人評」の「不卜評」に重出）

註。出板は貞享四年である。

八　連　句

（イ）附合論

「三〇九」

師のいはく、たとへば哥仙は三十六歩也。一歩もあとに歸る心なし。行にしたがひ心の改は、たゞ先へ行心なればなり。（しろさうし。「作法」より一部重出）

「三一〇」

先師曰、一卷表より名殘迄、一體ならんは見ぐるしかるべし。（去來抄、修行教）

「三一一」

先師曰、發句は昔より樣〻替り侍れど、附句は三變にとゞまれり。むかしは附物を專とす。中頃は心附を專とす。今は移り・響・爾保比・位を以て附るをよしとす。

杜年曰、いかなるを響・匂ひ・移りといへるにや。去來曰、支考等あらましを書出せり。是を手にとりたるごとくにはいひがたし。いま先師の評をあげてさとさん、他はおしてしらるべし。

赤人の名はつがれけりはつ霞　史邦

鳥もさへづる合點なるべし　去來

先師曰、うつりといひ、匂ひといひ、實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悦び給ひけり。爰におもへば、匂ひといふも、移といふも、わづかに句作のあやにして、のると乘らぬとの境なれば、冷暖自知の時ならでは、悟し明らむる事あるまじ。此句もし、赤人の名もおもしろやとあらば、鳥も囀るけしきなりけり　とも作るべきを、名はつがれたり（マヽ）　といへるより、合點なるべし　とは相うつり行くところ、味ひ見らるべし。響はうてばひゞくが如し。たとへば

くれ縁に銀かはらけを打くだき
身細き太刀のそるかたを見よ

先師此句を引て敎るとて、右の手にて土器を打つけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ける。一句〳〵に趣のかはる事なれば、言語に盡しがたきところ看破せらるべし。

杜年曰、句の位とはいかなる事にや。去來曰、前句の位を知て附る事なり。たとへよき句ありとも、位應ぜざればのらず。先師の戀の句をあげていはく、

上置（うはおき）の干菜きざむもうはのそら
馬に出ぬ日は內でこひする

前句に人の妻にもあらず、武家・町人の下女にもあらず、宿屋・門屋の下女なりと見て、位を定めたるもの也。（去來抄、修行敎。一部分「俳諧一般」の「本質論」の項に重出）

「三一二」

遺稿ノ夜話に、元祿のはじめ奧羽の紀行に、葛の松原を撰して湖南より武江に遣したるに、故翁の返書に、文章は例のおよびがたしと、其角も嵐雪もにくみ侍れど、他人の俳論の明なるほどは、自己の俳用の暗きにも似たらん。響とは例の起情なり。走とは例の拍子なり。今さら別名をあぐる故なし。まして馨といふ事は、百韵が百句ながら二句の間にこもれるを、和歌には餘情といひ、俳諧にはにほひといふ。それを一法の名となせるは附合の事も不會得にや。去頃か難波の兩吟にも、自己の先作を取あはす合點にや。當前の工夫薄く、一座の名聞をかざらむとせば、風雅の冥加にもかなふまじ。其外に遊山翫水の沙汰あれど、我家に三條の法を忘れずば、五刑の外は罪ゆるすべしとあり。（十論爲辨抄、第九段）

「三一三」

師の曰、付といふ筋は、匂・響・俤・移り・推量など〻形なきより起る所也。こゝろ通ぜざれば及がたき所なり。（あかさうし）

「三一四」

杜年曰、面影にて附ると云はいかゞ。去來曰、うつり・ひゞき・匂ひは附樣の鹽梅也。おもかげは附やうの事也。むかしはおほくは其事を直に附たり。それを面影にて附るといふは、

草菴にしばらく居ては打やぶり

いのちうれしき撰集の沙汰

初は、和哥の奥儀はしらず候　と附たり。先師曰、前を西行・能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附んは手づゝならむ。たゞ面影にて附べしとてかく直し給ひぬ。いかさま西行・能因の面影ならむとなり。又人を定ていふのみにもあらず。たとへば、

發心のはじめにこゆるすゞか山
　内藏の頭かと呼ぶ人は誰そ

先師曰、いかさま誰そがおもかげならんとなり。面影の事支考も書置たり。見合すべし。（去來抄、修行敎）

「三一五」

俳諧付やうの事、師說に千變萬化すといへ共、つまる所は三つに極る、執心あらば口傳をうくべし。

俤の句　口傳

前尼に成べき宵のきぬ〴〵
月影に具足とやらを見透して

思ひなしの句　口傳

前半分は鎧はぬ人も打まじり
舟追のけて蛸の喰あき

景氣の句　口傳

前乘懸の挑灯しめす朝風
汐さしかゝる星川の橋

（宇陀法師）

「三一六」

師の曰、俳諧之連哥といふは、よく付といふ字意也。心敬僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、たゞむなしき人のいつくしくさうぞきてゐたるなるべしと、ある俳書ニ有。又付の事は千變萬化すといへども、せんずる所只俤と思ひなし、景氣、此三に究り侍るよし、師のいへるとも有。（あかさうし）

註。前半と同旨の文「宇陀法師」に見えてゐる。

「三一七」

附合十七體別帋に記進候。初心にハ見せ申されまじく候。術のかなはぬ内に此味をつけんといたし、却而一句もとゝのハず附意もしれぬ事に成ものに候。又むづかしきもの也、かゝる味はとてもかなふまじと退く人もあるものにて、術叶ひ候後ニ扱ひ候得ば、一卷のはこび甚むづかしきところにて、人のつけなづみたるを或は響或は情などにて起して付て、變化おもしろく成申候。

さもなき人ハうちこし三句を恐れて、つまる處はいつも〳〵逃句のみいたし候ハ初心に見へ、功者おこして二三句も附たる上にむりに付るも、炎天に砂道をたどるごとくなるものニ候。能〳〵御考御扱被レ成候ハヾ鬼に鐵棒にて可レ有候。門人のうちにも五七人ならでさたいたし不レ申候。名高くても附合の術さほどになき人、却而迷ひ可レ申と存候故ニ候。かくし申にてハ無御座候。十七體を得たる上が千變萬化の術を得る事ニ候。只つくとつかぬといふこと斗知て、附合は千變萬化と口にていふ人御ざ候。おかしく候。十七體の法も知らずして何とて千變萬化の働が出來可レ申や。百韻千句に及びても附心一二體を出不レ申候。しりたるものハ笑ひ候。小器ハはやくみつる輩多く、のちにハ人〻あけて通し相人にならず、只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢になり、陰にてハ俳諧氣違ひなど〻名をつけられ候もあさましく候。御連中よろず御しめし可レ被レ成候。（書翰集、北枝宛、前後略。元祿三年六月廿七日）

「三一八」

或人問云、蕉門の附句十七體の教有と也。一とせ路通此浦に來りて、人〳〵に傳受する。定而此事を聞給らん。

去來答曰、十七體とやらん、四體とやらん書たる文を破りたまふ事はうけ給り侍る。是を傳受し給ふ事はしらず。先年野水、先師にかたりて曰、近來大津の連衆名古屋に來て、蕉門十七躰の附句不レ殘傳受し侍るよしを申。名護屋の連衆かつて信ぜず、もしかゝる事も侍るや。先師の曰、

これ誠に斗方なき句也。先年加賀の門人何がしが許より、常に遠國に侍れば、親しき教を受る事もかなはず、願くは附句の體書記し示し侍るべきよしを望む。是がために附句の大數を書出し侍れども、如レ此しるさば、かえりて初心のまよひ有べしとおもひとりて、終にその書をやむ。さだめし反古のはしをひろひ見て、是を云ふなるべしと大笑ひし給へり。（旅寐論、餘評）

連

「三一九」

先師曰、氣色はいかほどつゞけてもよし。天象・地形・人事・草木・魚蟲・鳥獸のあそべる形容みな〳〵氣色也。（去來抄、修行教）

句

「三二〇」

師の云、發句の物・脇の物・第三のもの・平句の物と其位ある事也。ことゞくにかく云にはあらず、其位を見知るべしといへり。（くろさうし）

「三二一」

先師曰、附物にて附る事、當時好ずといへども、附物にて附がたからむを、さつぱりと附物にて付たらむは又手柄なるべし。（去來抄、修行教）

「三二二」

(師)又いはく、格は句よりはなるゝ也。はなるゝにならひなし。鳶に鳶を付、隱士の打越に隱士を出す類ィ、爰に至てせん儀なし。一たびはくるしからず。後の隱士は過てあやまち也。必うらやむ所にあらずと也。(くろさうし)

「三二三」

師のいはく、學ぶ事はつねに有。席に望て文臺と我と間に髪といれず、思ふ事速に云出て、爰に至て迷ふ念なし。文臺引おろせば即反古也と、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒すどし、鍔本に切込意得、西瓜切る如し。梨子くふ口つき、三十六句皆やり句などと、いろ〳〵にせめられ侍るも皆功者の私意を思ひやぶらせんとの詞也。(あかさうし。「俳諧一般」の「修行敎」より一部重出)

「三二四」

師ノ云、誹諧は文臺上にある中とおもふべし。文臺をおろすと、ふる反古と心得べしといへり。たふとき一言成べし。(篇突)

「三二五」

ある時心見に哥仙一卷四唸して送侍れば、我おもふ所よく見知侍る也。此上いふ所なし。猶秀物は時の仕合・機嫌をうかゞひ、千變萬化口の外より感ずべし。氣變に任すべしと也。(くろさうし)

「三二六」

按ずるに、天地の運行より人の身帶の浮沈も、六藝はまして咄の上手下手も、すべては物の拍子なれば、附句も一座の遲速を見合すべし。諸藝はまたれてする物なれば、其場の人をしづむるにしかずと、祖翁は實生にかたり給ふよし、遺稿の夜話に其事あり。(十論爲辨抄、第九段)

「三二七」

人の句前にて句の趣向いろ〳〵沙汰する事つゝしむ所也。或月次の座にて、其事を門人に示されし事あり。(くろさうし)

「三二八」

付句の心得いろ〳〵いひ出られし時に、前句を添て付心の顯るゝ事などならて見るべしと、さま〴〵句をさせて見侍られし事もあり。(くろさうし)

「三二九」

附句は付と付ざるとを論ずといへども、

松葉のこみに煮るなべぶた

如意輪の像の頰杖もうき

といふ句は、なまじゐなる前句を聞んよりは、此句ばかりがおもしろきぞかし。句毎に季のなき發句をすると思へと、先師も申されし。（蕉門俳諧語錄、下）

「三三〇」

付肌はさるものにて、先おもしろき句は前不聞とも匂ひにをしはからるゝ也。翁の詞也。（三河小町）

註。三河小町は白雪の撰である。

「三三一」

翁ちかく旅行思ひ立給へば別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげき、扨俳談を尋けるに、翁今思ふ體は淺き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに輕きなり。其所に至りて意味ありと侍る。（俳諧別座鋪、序の一部）

「三三二」

句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好候ハヾ頓而古く成べし。めづらし過候ハヾ飽心出可レ申、こしやくに成候ハヾ後句石で手をつめたるやうになるべし。俳諧地をよく御つゞけ被レ成處〻風景句作ほのか成やうにあれかしと、此後の事を被レ存るゝのみに御座候、此外申事無二御坐一候へば不具頓首。（書翰集、東藤。桐葉宛の一部。貞享元年三月十四日。「句作論」より重出）

「三三三」

發句に目立たる事は、一卷の奥までも遠慮すべき事なりと師說。（俳諧問答青根が峯、同門評）

「三三四」

四句め六句めにふり（振）有事書〻に出たり。沓冠の揃ひたる句のらぬ物也。近年四句め・六句めは點のなき所とて、點取俳諧衆嫌ふよし。よき句ならば所にはよるまじ。師戯云、點のなき四句め・六句めに秀逸して肝つぶさせたるがよしとて、常に案じられたる事もありけり。（宇陀法師）

（ロ）附句評

「三三五」

一とせ芭蕉庵にて三吟はいかいありける時、（許六ノ跋）

寒菊の隣もありや活大根　許六

寒菊にいけ大根同季の取合せ也。

多さし籠る北窓の煤　翁

此句、世間煤を雪とする句也。煤の一字俳諧の讀かたにして、達人の手柄といふはこれ也。しらぬ人は等閑に見過し、蕉門の不可思議をしらず。第三嵐蘭にあたれり。數剋案じ申され侍れども出ず。後に宿のよせ馬など、いつも此樣な横小路へ牽入置候と申されければ、先師のいはく、よせ馬といふ物、今まで何千度出候やらしらず、是みな世にある三合のうち也と申されければ、在郷より宵から馬を連來り寒がらせ申と、嵐蘭かさねて申されければ、眞直にそれがよき第三にて侍る也とて、

月もなき宵から馬を連て來て　嵐蘭

と、先師句作り申されたり。是は人情平話の道具をもつて、はいかいの形恰合（好）に切り合せ出したる物と知るべし。後代の人、此句をよく得心したらば、猿蓑已後の四五集、明かに埒明べし。（中略）深川の俳諧に

奉行の槍に誰もこはがる

と、云ふ句翁せられて、後に誰の一字は前句の噂也と、くやみ申されたり。（歴代滑稽傳、俳諧指南。一部「句作論」に重出）

「三三六」

むかし故翁に供せられて、三河の新城といふ所にて〻角前髪のにくい疱（イモ）づら　といふ花前に、人〻〻案じ入たるを、我その句評に、いつぞや近江の守山を過るに、かゝるわつぱの疱（イモ）づらが、太神樂のさゝらを摺たれといへば、故翁は例の笑ひながら、論語の多識はいかに心得たるぞ。子貢には文をこらし、子路には文をすゝむ。教誡の二用もその事也。それをなどいはざるやと〻咲花に獅子のさゝらを摺ならし　と其句を其まゝにさだまりぬ。我その時に此附を疑ひて、俳諧はかく前句の人をとらへてぞ、事を直にいふ物にやと、其夜はまどひて寐られず。曠野猿蓑の二集より、あらゆる故翁の附合を見るに、十が五つは、其さまなり。つとめての日、その事を申に、故翁のいへる、我と俳諧にあそべる事、二とせか三とせならん。明暮の附合を聞ながら、それらの集を見るに及ばず。それを隨類得解といひて、機緣の時ならねば決して知がたし。（十論爲辨抄、第九段。前半「發句」の「句作論」に重出）

「三三七」

（先師いはく）又霜月や鴻のつく〻〻双居て　と云發句に、多の朝日のあはれ也けり　といふ

脇は、心・詞ともに俳なし。ほ句をうけて一首の如く仕なしたる處俳諧なり。（しろさうし。「俳諧一般、本質論」の項より一部分重出）

「三三八」

つと朝日にむかふ横雲　　去來

青みたる松より花の咲こぼれ

先には〳〵すつぺりと花見の客をしまひけり　と付侍るが先師の顔つきをかしからざれば、又前を乞て此句を附なほす。先師曰、いかに思ふて附直し侍るや。予曰、朝雲ののどかに機嫌よかりしを見て、初に附侍れど能見るに、此朝雲のきれいなるけしきいふばかりなし。これをのがしては詮なかるべしと思ひ、附直し侍るといへり。先師曰、やはり初の句ならば三十棒なるべし。猶陰高きを直すべしとて、今の五文字にはなりけり。（去來抄、先師評）

「三三九」

綾の寐まきにうつる日の影　　去來

なく〳〵も小き草鞋もとめかね

先師曰、よき上臈の旅なるべしとぞ。予これをきゝて、頓に此句を附侍りける。好春曰、上臈の旅ときゝて言下に句出たり。蕉門の徒の修練格別也と感ず。（去來抄、先師評）

「三四〇」

二ッにわれし雲の秋風　　正秀

中連子中きりあくる月影に　　去來

正秀亭の第三なり。はじめに〳〵竹格子影もまばらに月澄て　と付侍けるを、先師かくは斧正し給けり。其夜ともに曲翠亭に宿す。先師曰、今夜初て正秀亭に會す。珍客なれば發句は我なるべしと兼て覺悟すべき事也。其上發句と乞はゞ好惡を忘らばず速く出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある。汝が發句に時をうつさば、今宵の會むなしからむ。餘り不興のいたりなれば我が發句を出すべしとて、其夜は先師の發句なりし。正秀忽脇を賦す。二ッにわるゝと、はげしき雲の氣色なるを、かくのびやかなる第三附る事、前句のけしきを探らず、未錬の事なりと、夜すがらいかり給ひける。去來曰、其時に、〳〵月影に手のひらたつる山見えて　と申一句侍りけるを、たゞ月の殊更にさやけき處いはんとのみなづみて、位をわすれ侍ると申き。先師曰、其句を出さばいくばくのましならん。此度の膳所の耻を一度すゝがん事を思ふべしと也。（去來抄、先師評）

「三四一」

前句　ぽんとぬけたる池の蓮の實　　芭蕉

咲花にかき出す椽のかたぶきて

此前句出る時、去來曰、かゝる前句をのがすべからずとて、數刻案じたれど皆〳〵なし。先師に附句を所望しければ、斯こそ附給へれ。

くろみて高き樫木の森　芭蕉

咲花に小き門を出つ入つ

此前句出ける時、去來曰、前句全躰樫木の森の事をいへり。その氣色を失はず、花を附る事むづかしかるべしと、先師の附句を乞ければ、斯付て見せ給ぬ。（去來抄、先師評）

註。芭蕉の評語はないが、附句に依つてその意を示せるものとして、掲出した。

「三四二」

發句・平句共に末のおくるゝと云事有。哥にも大切に申給ふよし。〻降つみし高根の深雪解（みゆき）にけり　とつよくいひ侍るには、清瀧川の水の白波　とならでは成がたきよし。ある時深川の庵へ訪ひける時、夜ァ（べ）さる會にて、

人聲の沖には何を呼やらん

と云前句有て、

須磨の鼠の舟きしる音

と案じつれ共、音の字前句の聲にさし合案じ煩ひて、

鼠は舟をきしるあかつき

と付たりと申されたり。許六云、此曉の一字有難き事也。一夜案じ給ふ骨折、此一字に見えたり。と申せば、先師起あがりて云、曉の力き〻しり給ふやといふ。六云、尤須磨の鼠、新數物とはいへど、舟きしる音といふ下の七字大きにおくれたり。此曉の中には須磨の鼠、明石の火用心（ヒヨウジン）、一として殘る物なしと申せば、例の鼻をくん〳〵と吹ならし、予が一句すれば一座はつといひたるまでにて、草鞋はきて胸中をさがす人なしと、よろこばれけり。（宇陀法師）

註。「誹諧問答青根が峯、自得發明辨」に同旨の文が見えてゐる。

「三四三」

又猿蓑に脇三を三體に仕わけてなし置たり。心付て見るべしと也。身はぬれ紙のとり所なき

連句

といふ句を云出侍れば、師の曰、是一體新に見へ侍る也。體格は定がたし。心がけて勤るに猶あるべし。（くろさうし）

「三四四」

桐の木高く月さゆる也

門しめてだまつて寐たる面白さ

この事先師のいはく、すみ俵は門しめての一句に腹をすへたり。試に方〻門人にとへば皆、泣事のひそかに出來しあさ芽生（芽）　といふ句によれり。老師の思ふ所に非ずと也。（あかさうし）

註。「門しめて」「泣事の」共に芭蕉の附句である。

「三四五」

（許六云）予が宅の誹諧に云、

今はやるひとへ羽織を着連立
　奉行の鎧に誰もかくるゝ

一卷出來終て師の云、此たれの字、全くぜん句の戛なり、是仕損じなりといへり。（誹諧問答青根が峯、再呈下）

「三四六」

野坡曰、炭俵集撰の時

御頭へ菊もらはるゝ迷わくさ

と有りて、四句ばかり有て、また御袋といふ句あり。同意の同字いかゞあらんと尋ねければ、翁こたへて曰、もしも難ずる人あらば、不吟味なりといひてありなんかし。（蕉門俳諧語錄、上）

「三四七」

一とせ伊賀の上野にて、「芋幹（カラ）の脇刈したる秋の風」といふ句を、「岡の月夜」といふに附たるを、其後の次手に故翁のいへりけるは、あの句は芋の葉とすべけれど、葉と幹とのよしあしは我としる時あるべしとぞ。我はた其時は思ひまどひて、故翁は脇刈の子細をしらで其葉の無用をと疑ひしに、そのゝち膳所の曲翠亭にて、尾の荷兮が、蔦の葉の評を聞て、さてはかの芋の葉は岡の月夜のうつろひに秋風の姿なりしをと、はじめて心骨に銘じ侍し也。（十論爲辨抄、第五段）

註。「葛の葉の」の評については「一八一」參照。

「三四八」

歩行ならば杖つき坂を落馬哉
　角のとがらぬ牛もあるもの

此句は門人土芳が句也。先師此句を風與（ふと）仕たり。季なし。皆脇して見るべしとあり。おの〳〵さま〴〵つけて見侍れども、こゝろにのらずしてふと此句を見せ侍れば、よろしとてその儘取て付られ侍る。師の心味ふべし。（あかさうし）

「三四九」

市人にいで是うらん雪の笠
　酒の戸たゝく鞭のかれ梅
　朝がほに先だつ母衣を引づりて

此第三は門人杜國が句也。此第三せんと人〻さま〴〵いひ出侍るに、師のいはく、此第三の附かたあまたあるべからず。鞭にて酒屋をたゝくといふものは、風狂の詩人ならずばさもあるまじ。枯梅の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三あるべからずと也。（あかさうし）

「三五〇」

爰元度〳〵會御座候へ共いまだかるみニ移り兼しぶ〴〵の俳諧散〻の句のみ出候而致三迷惑二候。此中脇二ッ致候間懸二御目二候。

折〳〵や雨戸にさはる荻の聲
放す所におらね松蟲
荒〳〵て末ハ海行野分哉
鶴の頭をあぐる粟の穂

鶴ハ常體之氣しきに落可レ申哉。（書翰集、去來宛の一部。元祿七年八月九日）

「三五一」

上略

一、神矢根、螻蛄乍ニ少分ニ御用に立滿足申候。各感心、鬪の足輕能比合之奇作にて候。過れば手帳の部に落候。世に鳴もの〻三つ物惣而地句等、皆〳〵手帳の外は三才兒童の作意ほどもうごかず候。町もの〻拵の俳諧にも我黨五三人は見あき候へども、いまだ爰を專と句を拵候者共も歷〻相見え候。能句をうるさがる心ざし感心可レ有事にや。歳暮の大荒目をさまし候。みなと紙の頭巾は人〻空に覺えて笑候。

一、愚門三ッ物京板にて御覽可レ被レ成候。江戸他家之事は評判無益と筆をとゞめ候。其角、嵐雪が義は年〻古狸よろしく鞍打はやし候半。

一、桃隣が五ッ物は中は愚風に心をよせ所〻點取口を交え、はか〴〵敷も無御座候へども、衆

猶口過を宗とするゆへ堪忍の部の能方に定り候。

一、保生沾圃が三ッ物は力なき相撲のもの、手合を見事にしたる斗に候。されど共力ずまふのねぢ合には增り候半とおさめ候。

一、野坡が三ッ物は去秋愚風に移りいまだうゐ〳〵敷てさぐり足にかゝり侍れども、年來の功少增り器量邪風に立越候故見所多く候。惣而の第三、手帳の場を打なぐりたる一つの手柄故、是中の品の上の定に落付候。愚句は子供のけしきあれたる體に見請候へば一等鎭め候而目にたゝせず候。彼いせに知人音信てたより嬉しき、とよみ侍る便の一字を取つたへたる迄に候。

一、ミの如行が三ッ物はかるみを底に置たるなるべし。惣而の第三は手帳の部にありといへ共、世上に一分を出す風雅の罪ゆるし置候。

一、譫所正秀が三ッ物三組こそ跡先見ずに乘放たれ、世の評詞にかゝはらぬ志あらはれておかしく候。彦根五ッ物のいきほひにのつとり、世上の人をふみつぶすべき勇體、あつぱれ風雅の武士の手業なるべし。

世間此三通りの外は手にとる迄もなきものに候。（書翰集、許六宛の全文。元祿七年二月二十五日）

註。文中に論じられてゐる三ッ物五ッ物は示されてゐないが、芭蕉が門弟の三ッ物五ッ物を一般にどの程度に評價してゐたかを知るには、參考になると思つて引いたのである。

「三五二」

兩吟感心、拙者逗留の内は此筋見えかね無二心元ニ存候處さて〳〵驚入候。五十三次前句とも秀逸かといづれも感心申候。其外珍重あまた、惣體かるみあらはれ大悦不レ少候。（書翰集、猿雖・土芳宛の前半。元祿七年）

註。兩吟は示されてゐないが、參考までに採錄した。

「三五三」

或二三子俳諧にしほこりて、哥仙二三卷老翁に點を乞ふ。師是をうけず。再三の後その人に對していはく、皆秀作也。しかれども我おもふ所に非ず。しゐてとらんとせば、是彼の内、此二三やり句と捨られし物や取侍らんと也。その人猶思ひやまずして、終に老師の門に入となり。（くろさうし）

註。附合は示されてないが、蕉風の附合と他門の夫を考へる上に於て、參考になるものがあるので掲出した。

「三五四」

梅にすゞめの枝の百なり　去來

是は歳旦の脇なり。先師深川にて聞て曰、此梅は二月の氣色なり。去來いかにおもひ誤て、歳旦の脇には用ゐけるとなむ。（去來抄、先師評）

註。「旅寐論」に同旨の文が見えてゐる。

「三五五」

一とせの秋、蔦の葉は茶をのむ人をなぐさめて　といへる第三を、湖南の珍碩はいかにきくらんと、文して問ひ侍るに、花紅葉ならば酒をこそ飲べけれ、と答へたれば、さてはおのれも皮骨は得ぬるをと、阿叟もにくみ申されし也。支考が東行の比、風雅はいかにし侍らんと、とふ人あれば、先ッこの第三を明し給へといふに、よき人はよく、あしき人はかの叟の口癖にて、また寂寞をやられけるよと、平呑に逢ひたるはいと口おし。（葛の松原）

「三五六」

一句のしたて結ぶはわるしと承れど、未熟のまどふべき夏也。月くらき麓は馬の口とりて　といふ第三を支考が申侍りたるに、くらきといふはむすびにて、一句のさま氣だかならずとて、有明にとはあらたまり侍りき。（葛の松原）

「三五七」

（上略）笠置より河舟にのりて錢司（デス）といふ所を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。されば先の夜ならん、

山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁

と承し句は、まさしく此所にこそ候へと申ければ、あはれ吾腸を見せけるよとて、阿叟も見つゝ

わらひ申されし。（笈日記）

「三五八」

分別なしに戀をしかゝる　去來

淺茅生におもしろげつく伏見脇　芭蕉

先師、京より野坡方への文に、此句を書出し、此邊の作者いまだ此甘味をはなれず、そこもと隨分輕みをとり失ふべからずと也。（去來抄、先師評）

「三五九」

丁稚が擔ふ水こぼしけり　凡兆

初は糞なり。凡兆曰、尿糞の事も申べきか。先師曰、嫌べからず。されど百韵といふとも二句に過べからず、一句なくてもよからむ。凡兆、水に改む。（去來抄、先師評）

「三六〇」

初懷紙評註　貞享三年註

日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角

元朝の日のはなやかにさし出て、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩みにかけて言つらね侍る祝言外にあらはす。流石にといふ手爾葉感おほし。（「二三一」參照）

砌に高き去年の桐の實　文鱗

貞德老人の云、脇躰四道ありと立られ侍れども、當時は古く成て、景氣を言添たるを宜とす。梧桐遠く立て、しかもこがらしのまゝにして、枯たる實の梢に殘りたる氣色、詞こまやかに、桐の實といふは桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に木末は冬めきて、木枯の其まゝなれども、ほのかに霞、朝日にほひ出て、うるはしく見え侍る躰なるべし。但桐の實見付たる、新敷俳諧の本意かゝる所に侍る。（この項の一部「俳諧一般論」の「本質論」に重出）

雪村が柳見に行棹さして　枳風

第三の躰、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少し替りめあり。柳見に行く　とあれば、未景不レ對也。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節その柳を見て書んと、自舟に棹さして出たる狂者の躰、珍重也。桐の木立詠やう奇特に侍る。付やう大切也。

酒（註）の幌（トバリ）に入逢の月　コ齋

四句目なれば輕し。其道の樣躰、酒屋といふもの能出し侍る。幌は暖簾など言ん爲也。尤夕の景色有べし。

註。「花の故事」に「酒屋」とあり。

秋の山手束の弓の鳥賣らん　芳里

狩の鳥を得て、市に持出て賣躰さも有べし。酒屋に便りたる珍重の付樣也。手束の弓は短き

弓也。秋季を持たる鳥の名多く言はずして、秋の山と大様に置たる大切の所也。看人心を甄味すべし。

炭竈こねて多のこしらへ　杉風

前句ともに山家の躰に見なして付侍る。獵師は鳥を狩、山賤は炭竈を拵て多を待躰、別條なき句といへども、炭竈の句作、終に人のせぬ所を見付たる新敷句也。

里〳〵の麥ほのかなるむらみどり　仙化

付やう別條なし。炭竈の句を初多の末、霜月頃抔の躰に請て、多畑の有様能言述侍る。その場也。

我乘る駒に雨おほひせよ　李下

是等奇意也。何を付たるともなく、何を詠めたるともなし。里〳〵の麥と言より旅躰を言出し、むら緑などうるはしきより雨を催し侍る景色、辨口筆頭に不レ掛。

朝まだき三島を拜む道なれば　擧白

是さしたる事なくて、作者の心に深く思ひこめたる成べし。尤旅躰也。箱根前にせまりて雨を佗たる心、深切に侍る。

念佛に狂ふ僧いづくより　朱絃

此句僅に興をあらはしたるまで也。神社には佛者を忌む物なり。參詣の僧も神前には狂僧也。

三嶋は町中に有社なれば、道通りの僧も寄べきか。

淺ましく連歌の興をさますらん　蚊足

連哥の興をさます付様珍し。度〻我人の上にも有事にて、一入珍重に侍る。

敵寄せ來るむら松の聲　チリ（註）

聞えたる通り別意なし。連歌に軍場をおもひ寄せたるなり。

註。「花の故事」に千里。

有明の梨打烏帽子着たりけり　芭蕉

付様別條なし。前句軍の噂にして、又一句更に言立たり。梨打ゑぼし（註）にてあしらひ付様かろくしてよし。一句の姿・道具、眼を付て見るべし。

註。「花の故事」に「軍に梨打ゑぼしにて」

うき世の露を宴の見おさめ　筆

前句を禁中にして付たる句也。烏帽子を着るといふにて、却て世を捨ると言心を儲たり。觀相なり。

憎まれし宿の木槿の散たびに　文鱗

宴は唯酒盛と言心なれば、世のあぢきなきより、戀の句を思ひ儲たり。木槿のはかなくしほりめく、我身の思ひしほると言より、にくまれしと五文字置なり。戀の句作尤感情あり。

後住女きぬたうち〳〵　其角

後住女は後添の妻といはんため也。憎まれしと言にて後添の物ど和せざる味をこめたり。砧うち〳〵と重ねたるにて、千萬の物思ひつるやうに聞へ侍る。愁思有心にて前句を乘たる也。

翫味淺からず。

山ふかみ乳を呑猿の聲かなし　コ齋

砧は里・水邊・濱浦等に多く讀侍る。尤嫌捨・更級・よし野など山類にて讀侍る。砧を山類にてあしらひたる句也。乳を呑猿といふにて、女といふ字をあしらひたる也。幽なる意味、しかもよく通じたり。

命を甲斐の筏とも見よ　枳風

猿の聲悲しきより、山川のはげしく冷敷躰形容したる付やう、尤山類をあしらひたる也。

法の土我剃髪を埋み置む　杉風

筏のあやうく物冷じきを見て、身の無常を觀じたる也。甲斐といふは、古人佛者古跡等多く、自然に無常も思ひ寄たれば也。剃髪を埋み置作意、新敷哀をこめ侍る。

はづかしの記(註)をとづる草の戸　芳里

別意なし。草庵隱者の躰なり。さもあるべき風流なり。

註。「花の故事」に「跡か」とある。

さく日より車かぞゆる花の陰　杉風

前句、隱者の躰を斷はる也。尤官祿を辭して隱れ住人のいかめしき花見車を、日〻にかぞへて居る躰也。唯句毎に句作の和らかに珍らしきに目を留べし。

はしは小雨をもゆるかげろふ　仙化

春の景氣也。季のつかひやうは、かろくやすらかにしたる所を見るべし。花の閉目などはやす〳〵とかろく付る物也。

殘る雪殘る案山子の珍らしく　朱絃

是又春のけしき也。付樣させる事なし。野邊・田畑の匂殘りたる破たる案山子の立たる姿、哀なる景氣見えたる也。秋の冬こめて春まで殘りたるに、薄雪のかゝりたる、尤感情なるべし。

句

しづかに醉て蝶をとる哥　擧白

句作の工〻なるを興じて出せる句也。蝶をとり〳〵哥は醉てと興じたる躰、誠に面白し。

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　チリ

此句、付所少し骨を折たる句也。前句蝶を現在にしたる句にあらず。蝶とる哥といふを諷物にして付たる也。殿守は禁裏の下官のもの也。蝶とる哥といふに、風流なる禁裏に思ひなして、夜すがら夜明し興有て、殿守等が明て猶珍敷長ヶに見ゆる躰也。

はげたる眉を隠すきぬ〴〵　芭蕉

朝ぼらけといふより、きぬ〴〵常の事也。はげたる眉といふは、寐過してしどけなき躰也。伊勢物語に夙に殿守司が見るになど〻言べきも、この句の余情ならんか。

罌子咲て情に見ゆる宿なれや　罌風

はげたる眉といふに、老長たる人のをとろへて、賤の家などにひそかに住る躰也。罌子は哀なる物にして、上つかたの庭には稀也。爰にとり出て句をかざり侍る。是等の句にて植物・草花のあしらひ、所〻に分別あるべし。

葉分の風を矢筈切に入　コ齋

矢筈切と言詞先あたらし。前句民家にして、武士の若者ども與風珍らしき物陰など見付たる躰也。大形は物語などの躰をやつしたる句也。或は中將なる人の鷹すへて小野に入、浮舟を見付たるなどのためしならん。されども其故事を言にはあらず。其余情のこもり侍るを意味と申べきか。

かゝれとて下手の懸たる狐わな　其角

藪陰の有樣あり〳〵と見へ侍る。しかも句作風情をぬきて、たゞ有のまゝに言捨たる句續き、心を付べし。

あられ月夜の曇る傘　文鮮

冬の夜の寒深き躰を言のべ侍る。傘に霙ふる音いと興あり。しかも月さえ〴〵と見ゆる尤面白し。狐罠といふに、こまかに付侍るはわろし。

石の戸樋鞍馬の坊に音すみて　擧白

あられは霜雪といふより少し寒風冷數聞ゆる物なるに依て、鞍馬といふ所思寄たり。昔は名所の出しやう、砧に須磨の浦・十市の里・吉野〻里・玉川など〻付て、證哥に便りて付る。霙は那須の篠原、雪に不二、月に更級と付侍るを、當時は句の形容によりて名所思ひ寄る、尤心得ある事也。

註。「花の故事」に「證か寄に便りて」とある。

我三代の刀うつ鍛冶　李下

此句詠中の奇特也。鞍馬尤人〻言傳へて、僧正が谷など打ものに便る事也。石の戸樋など〻いふに鍛冶、近頃遠くおもひ寄たる珍重也。浮き地・清き水をゑらみ、名劔を打べきとおもひしより一句感情不レ少、三代といふにて猶分骨、かぢ名人といはんため也。

永祿は金乏しく松のかぜ　仙化

永祿は其時代を言ん爲也。鍛冶の名人多くは貧成る物也。仍て金乏と言る也。前句しかも明らかに聞え侍る。是等よく心を付て翫味すべし。

近江の田植美濃に耻らむ　朱絃

只上代の躰也。金乏といふより、むかしを言句也。昔は物毎簡略にして金もとぼしき事、人〻言傳へ侍る。美濃近江(註)のちかき所にて、田植などの風流も遠き田舍とは違ふべし。

註。「花の故事」に「近江は近き所にて」

とく起て聞勝にせんほと〻ぎす　芳里

時節を言合せたる句也。美濃・近江と一所を言にて、郭公をあらそふ心持有て、聞勝にせんとく起てと句作れり。

船に茶の湯の浦哀なり　其角

ほと〻ぎす、水邊・津・浦などにいふ事勿論也。船中にて茶の湯などしたる風流奇特也。思ひがけぬ所にて、茶の湯を出すは茶窓の好士なり。されば思ひよらぬ物を前句におもひ寄たる、又俳諧の逸士也。(この項「個人評」の「其角評」に重出)

つくしまで人の娘をめしつれて　李下

此句、趣向・句作・付所各具足せり。船中に風流人の娘など盗て、茶の湯などさせたる作意戀に新らし。感味すべし。松浦が御息所をうばひ、或は飛鳥井の君などを盗とりたる心ばえも、おのづから築紫(筑)の人の粧ひ便りて余情かぎりなし。

彌勒の堂におもひ打ふし　枳風

此句、尤やり句にて侍れども、邊土の哀をよく言捨たり。句段〻其理つまりたる時を見て、

一句宜しく付捨たる逸句不レ勞。

待かひの鐘は墮たる草の中　芭蕉

彌勒の堂といふ時は、觀音堂・釋迦堂など〻言樣に參詣繁昌にも聞えず。物淋しき躰を心に懸て、鐘の地に落て葎の中に埋れ、龍頭わづかに見えたる躰見る心地せらる。五文字にて一句の味を付たり。注釋に及ばず。能〻味聞べし。

友よぶ蟾の物うきの聲　仙化

友よぶ蟾、近頃珍重に侍る。草村の躰、物すごき有樣、前句に言殘したる所をよく請(うけ)たり。うき聲といふにて、待便りなき戀をあひしらひたり。

雨さへぞいやしかりける鄙曇　コ齋

蟾の聲といふより田舍の躰を言のべたり。雨と付る事不レ珍といへども鄙曇珍し。しかも秋に言詞にあらず。古き哥によみ侍る。惣じて句〻、折〻古歌・古詩等の言葉所〻に有といへども、しゐて名句にすがりたるにもあらず侍れば、さのみとゞくしく不レ記。

門は魚ほす磯ぎわの寺　擧白

鄙の躰あらは也。濱寺などの門前に、魚干網などうちかけたる躰多し。曇り空にほし(註)付たる、却て作者の器量思ひ寄べし。

註。「花の故事」に「干す付たる」

理不盡に物くふ武者等六七騎　芳里

此句秀逸也。海邊の軍亂れたる躰也。民屋・寺中に押入て狼藉したる樣、亂國のさま誠にかく有べし。世の中穩に安樂の心ばへ、有がたくおもひ合て句を見るべし。

あら野〻牧の御召撰みに　其角

前句の勢よく替りたり。野馬とりに出立たる武士の躰尤面白し。三句のはなれ、句の替りやう、句の新らしきをよく〳〵眼を留べし。

鵙の一聲夕日を月に改めて　文鱗

段〻付やう文句きびしく續きたる故に、よく言流し侍る。か樣の所功者の心付べき義也。夕日淋しき鵙の一聲、と長嘯のよめるに、西行の、柴の戸に入日の影をあらためて、と讀る月を取合せて一句を仕立たる也。長嘯を本哥に用ゆるにはあらず侍れども、はいかいは童子の語をも、宜しきは借用ひ侍れば、何にてもあたるを幸に句の余情に用ゆる事先短なり。

糺の飴屋炑さむきなり　李下

洛下の景氣の尤やり句也。月・夕日に其地思ひはかりて見ゆ。

稻妻の木の間を花の心ばせ　擧白

働き言語にのべがたし。糺あたりの道すがら森の木の間勿論也。木の間に稻妻面白し。誠に秋の夜の花ともいふべし。

つれなきひじり野に笈を解く　枳風

此句の付やう一句又秀逸也。物すごき闇の夜の稻妻びか〳〵とする時節、聖、野に臥佗る。近頃新しきはいかいの眼、是等にとゞまり侍らん。

人あまた年とり物をかつぎ行　楊水

此句秀逸なり。聖の宿かり兼たる夜を大晦日の夜におもひ付也。先珍重。聖は野に臥佗たるに、世にある人は年とり物をかつぎはこぶ躰、近頃骨折也。前句の心を替る所、猶〻翫味すべし。

酒もりい(註)さむ金山が洞　朱絃

金山は我朝の大盜人なり。前句をよく請たり。註に及ばず。付樣明らかなり。

註。「花の故事」に「酒もり遊ぶ」とある。

當時の俳道意味心得がたし。願くば句解したまはらんやと侍りければ、即興に加筆し給ふ。終日の席、はせを翁の持病快からず。五十韵にして筆をたち給ふ。

貞享(享)三丙寅年正月　（初懷紙、全文）

註。本書は闌更の「落葉考」に收載されてある「初懷紙評註」に從うた。闌更は寶曆十三年に板行した「花の故事」に「初懷紙評註」を收載してゐるが「落葉考」のは、それを訂誤せるものと稱してゐる。「花の故事」とは殆ど變りないが、二三重要な異同だけを指摘しておいた。

「三六一」

山中三吟評語

曾良餞（はなむけ）

翁直しの一巻

馬かりて燕追行別れかな　北枝

花野に高き岩のまがりめ　曾良

「みだるゝ山」と直し給ふ。

月はるゝ角力に袴踏ぬぎて　翁

「月よしと」案事かへ給ふ。

鞘ばしりしを友のとめけり　枝

「とも」の字おもしとて、「やがて」と直る

青淵に獺の飛こむ水の音　良

「二三疋」と直し玉ひ、暫ありて、もとの「青淵」しかるべしと有し。

柴かりこかす峰のさゝ道　翁

「たどる」とも、「かよふ」とも案事給ひしが、「こかす」にきはまる。

松ふかきひだりの山は菅（すが）の寺　枝

「柴かりこかす」のうつり上五文字、「霰降る」と有べしと仰られき。

役者四五人田舎わたらひ　良

「遊女」と直し。

こしはりに戀しき君が名もありて　翁

「落書に」と直し給ふ。

髪はそらねど魚くはぬなり　枝

前句に心ありて感心なりと稱し玉ふ。

蓮のいととるもなか〳〵罪ふかき　良

さもあるべし、曾良はかくの處を得たりと稱し玉ふ。

四五代貧をつたへたる門　翁

「先祖の」と直し玉ふ。

宵月に祭りの上代かたくなし　枝

「有明」と直。

露まづはらふ獵の弓竹　良

秋風はものいはぬ子もなみだにて　翁

我（北枝）、此句は秀一なりと申ければ、各にも劣らぬ句有と挨拶し玉ふ。

しろきたもとのつゞく葬禮　枝
花の香に、奈良の都の町作り　良

「はふるき」と直し給ふ。

春をのこせる玄仍の箱　翁
長閑さやしらゝ難波の貝多し　枝

「貝づくし」と直る。

銀の小鍋にいだす芹燒　良
手枕におもふ事なき身なりけり　翁
手まくらに軒の玉水詠め佗　同
てまくら移りよし。汝も案ずべしと有けるゆへ
手枕もよだれつたふてめざめぬる　枝
てまくらに竹吹わたる夕間暮　同
手まくらにしとねのほこり打拂ひ　翁
ときはまりはべる。
うつくしかれと覗く覆面　枝
つき小袖黨うりの古風也　翁

此句に次四五句つきて、しとねに小袖氣味よからずながら直しがたしとて、其儘におき玉ふ。

非藏人なるひとのきく畠　同
我、此句は三句のわたりゆへ、向へて附玉ふにやと申ければ、うなづき玉ふ。
鳴ふたつ臺にのせてもさびしさよ　枝

連句

はこびよろしと稱し給ふ。

あはれに作る三日月の脇　同
かくなる句もあるべしとぞ。
初發心草のまくらに旅寢して　翁
かゝる句は、卷ごとにあるものなりと笑ひ玉ふ。
小畑もちかし伊勢の神風　同
疱瘡は桑名日永もはやり過　枝
對などはかくありたしと稱したまふ。
ひと雨ごとに枇杷つはる也　同
「雨はれくもる」と直る。
細ながき仙女の姿たをやかに　翁

我感心しければ、翁も微笑し給ふ。

あかねをしぼる水のしら波　同

仲綱が宇治の網代とうち詠め　枝

此句も、一卷のかざりなりと笑ひたまふ。

寺に使をたてる口上　同

鐘ついてあそばん花の散かゝる　翁

「ちらばちれ」と案事侍れど風流なしとぞ。

醉狂人と彌生くれ行　同

其人の風情をのべたるなり。されど擧句は心得あるべしとしめし玉ふ。（山中三吟評語、全文）

註。評は元祿二年である。

九　作法

「三六二」

（或人）先師の法式を破り玉ふ事を難ず。我（法衆）その事を辯ずる。そしる人の曰、しからば何事によらず、一利あらん事は古人の法を破り苦しかる間敷歟。我答云、吾子法を破り風を變じて、天下の人三分一是を用ひば新式を立らるべし。若是を信ずる人なくんば詮なかるべしと云〻。その後、先師是を聞給ひて、必人と諍ふ事なかれ。我誹諧におゐて或は法式を增減する事は、大旨ふまゆる所有といへども、今日の罪人たる事をまぬかれず。唯已後の諸生をして此道に安く遊しめん爲なり。心を以て考へ可（伺）知。凡法をやぶり風を變ずる事は其人に寄べし。又史邦が誹諧の法式、何れの書を用ひ侍らんと窺ひけるに、諸書の說〻互に是非有べし、其中、俳無言まづよろしかるべしと先師も宣ひける。（旅寐論）

「三六三」

師の門にその一書あれかしといへば、甚つゝむ所也。法を置と云事は重き所也。されども花のもとなどいはるゝ名あれば、其法たてずしては其名の詮なし。代〻あまた出侍れど、人用ひざれば何ゝが爲ぞや。法を出して私に是を守れとは耻かしき所也。差合の事は時宜にもよるべし。先

は大かたにして宜と也。たゞこゝろざしある門弟は直に談じて信用して書留るもの、密にわが門の法ともなさばなすべし。（しろさうし）

「三六四」

俳諧の式の事は連哥の式より習て先達の沙汰しける也。連哥に新式有。追加ともに二條良基攝政作レ之。今案は一條禪閤の作。この三ッを一部としたるは肖柏の作と也。連に三と數ある物は四とし、七句去ものは五句となし、萬俳諧なれば事をやすく沙汰しけると也。今案の追加に漢和の法有。是を大様俳諧の法とむかしよりする也。貞德の差合の書その外その書世に多し。その事をとへば、師、信用しがたしと云り。その中に俳無言といふ有。大様よろしと云り。差合の事もなくては調がたし。（しろさうし）

「三六五」

先師俳諧の新式に指合・てにをはの事は、多は先輩の式に似たれど、當流の用捨各別の事又多し。然共指合・てにをはの事は俳諧一通の法なれば時宜によるべし。廿五ヶ條の口訣は先師の奥儀にして、是をしらざれば俳諧の道にくらし。世に執心の人なき事を先師常になげき給ふ也。これらの事は人の信・不信の上なるべし。（宇陀法師）

註。廿五ヶ條は、支考の僞作と疑はれる點があるので、本書から省いた。

「三六六」

懐紙の事は百韵本式也。五十韵・哥仙みな略の物也。連歌の古式は表十句・名殘の裏六句・月七句去・花裏表に一本宛・表の内名所必一有。今も清水連哥は此如しとなり。師のいはく、古法表十句の例を守て八句の後二句過る迄、表に嫌ふものの類連歌に今にせず、俳にはくるしからず。連哥に龍虎・鬼女さし出たる類表の内嫌。俳諧にも鬼女はなりがたし。龍虎はくるしからず。その外人を殺す・切る・しばるなどの類は用捨すべし。百韵一所に過べからずと師の云也。（しろさうし）

「三六七」

師のいはく、たとへば哥仙は三十六歩也。一歩もあとに歸る心なし。行にしたがひ心の改はたゞ先へ行心なれば也。發句の事は一座、卷の頭なれば初心の遠慮すべし。八雲御抄にも其沙汰有。句姿も高く位よろしきをすべしとむかしより云侍る。先師は懐紙のほ句かろきを好れし也。時代にもよるべき事にや侍らん。又古來より新宅の會に、燃る・燒などの火の噂、追悼に、くらき道・迷ふ・罪・とが、船中に、歸る・しづむ・浪風等の類いむべき心遣ひと也。五躰不具の噂一座に差合事思ひめぐらすべし。ほ句のみに不レ限其心得あるべし。脇は亭主のなす事むかしより云。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句とて、むかしは必客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて挨拶を付侍る也。師のいはく、脇、亭主の句を云る所則挨拶也。雪月花の事のみ云たる句にてもあいさつの心也との敎也。ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて當季を定むべし。

是は連歌の習也。俳にも其心遣ひ也。師のいはく、ほ句に神祇・釋教其外一事ある時は應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも心にはあるべし。但水祝などの季一通りにして云句は、脇に戀なくてもあるべし。たゞほ句に依べし。對付・違付・うち添・比留の類むかしより云置所也。師云、第一ほ句をうけてつりあひ專にうち添て付るよし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すはり宜すべし。かな留メ自然にある心得口決あり。第一應對合體の心とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出るとよく聞しめ、させる事見えずとも作者より句意をあらはすやうに挨拶してよく聞ふせて脇すべし。心とゞかざれば無禮にして無下成事也。たとへば連哥のほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を以て文字留也。詩聯句に習て韵といふ也。第三は師の曰、大付にても轉じて長高くすべしとなり。或書に、留りの事むかし沙汰なし。宗祇よりの格式也。常用る通りなり。疑の切字のほ句の時は第三はね字にとめずと古來云り。うたがひの句二句去故也。覽はうたがひのはね字なり。句中に押へ字あり。や・か・いつ・何などの類也。又句によりて押字なくてはねるあり。一字はね也。をらん・ちらんの類也。哉留りのほ句の第三にて留メせずとむかしより云り。是治定の哉故にせずと也。花のさかり哉・月の光哉の類也。盛りにて・ひかりにてといふにかよふ也。先師のいはく、にてになるに留メくるしからず。にて留は嫌ふべしとなり。文字留・手爾葉留自然にあり。古法口傳有事也。一說、古書にあるは脇の句韵字留りゆへ、懷帋に文字留りならばざるやうに留也。若、脇、手爾葉にて留メば第三文字留にて留るとも云り。かくの事は達人

に有。常の留をよしとす。是此道の習也。第三は轉ずるを專とすれども脇の句によるべし。違付・取なし付等の句の時は、第三にて轉ずるにおよばざる事なり。ほ句、戀・神祇等のものにて脇是に應ずる時、第三に至り必是を轉じ、はなれてすべし。師の說也。四句めはむかしより四句めぶりなど云て、やすくかるきをよしとす。師のいはく、重きは四句目の體にあらず、脇にひとし。句中に作をせずと也。古事・本說など嫌ふ事也。春秋の季つゞき、四句目にて花月の句をする事必あるまじとの師說也。五句め・七句めの事、三て五覽など〻古說あり。七句めも同じ心得也。第三の後一順上の句を賞とす。中にも月の座は名ある所也。老分に當べし。同字を表に嫌ふも懷紙をたしなむ所也。て留・はね字留は句の一體表道具と也。裏に代て四春八木と連歌に古說あり。四句め春をせず、八句めに高うへ物せず、花につかゆる遠慮也。俳諧も其心得也。他の句を返すには不レ及。春出ば花を付べし。是呼出しの花となり。花の前句に秋の字用捨すべし。戀の花はむつかしきにわざと連哥に祕して、前句よりつ〻しむと也。俳其沙汰なし。月の定座をこぼす事、師のいはく、五十句より內にはあるべからず。奧に至つては少の興にも成るものなり。哥仙はくるしかるまじ、略の物故也。月の座、月の字有時も差合たる時は異名にてすべし。異名の仕かた人〻の作意にあるべしと師の詞也。又師のいはく、月は上句勝たるべし。落月・無月の句つ〻しむべし。時によるべし、法にはあらずと也。星月夜は秋にて賞の月にはあらず〻もしほ句に出る時はす秋にし、他季にて有明などする也。月といふ字に五句隔と新式にあり。師の曰、表に月二

ッ稀に有。此時は月數八ッ也。名の裏(名殘カ)はまれにも月なしと也。花の事は、花四本の内下の句は一句ばかり、定座まれにもこぼす事なしと也。賞花の句、前句への付心か。又その一句の心か。實は梅・菊・牡丹など下心にして仕立、正花になしたる句、その木草にしたがひ季を持たすべきか。或は正月に花を見る、また九月に花咲など云句いかゞと云ば、師の曰、九月に花咲などいふ句は非言也。なき事也。たとへ名木を隱して花と斗云とも正花也。花といふは櫻の事ながら都而春花をいふ。是等を正花にせずしては花の句多く出る賞輕しと也。宗祇(祇)の時代迄百韵花三本也、雨一ッ也。宗長の時にいたり、匂ひの花一本・雨一ッ勅許を蒙り度旨奏聞せられて、花四本・雨二ッには究り侍る。連哥の式と師の詞也。裏一順の事も初のごとくかろ〳〵とあるべし。句なみを追ふにも不レ及と也。揚句は付ざるよしと古說有。今一句に成て一座興覺る故也。また兼て案じ置とも云り。ほ句主并に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば揚句を筆にすべし、ほ句にある文字をつゝしむと也。にほひの花にて春季五句に至るとも揚句に季をはなすべからず。たとへ季六句に及てもすべしと也。いづれの季。戀にても揚句此心得なり。句ぶり心得あるべし。（しろさうし。一部分「附合論」に重出）

註。本項「宗祇の時代迄百韵花三本也」より「花四本・雨二ッには究り侍る」まで「宇陀法師」に見えてゐる。

「三六八」

哥仙は百韻三分一なれば、式法一座三句の物は一つたるべき由、先師申されき。（宇陀法師）

「三六九」

又戀の詞・述懷の類・祝言に云たる句は表の内いかゞ侍らんとたづねる時、師のいはく、句によるべし。文字はくるしからず。祝言にいひなすとても、人のうへに云はいよ〳〵述懷也。花のさびしきの類はくるしからず。崩し壁に下る夕顔などと全の貧家を移す句は用捨すべし。他人の句はとがむまじと也。（しろさうし）

「三七〇」

又戀・無常其外嫌ふ古事、本祝を下心にして表にあらはさず。又他物のうへにかり用ひたるなどの句の類いかゞ侍らんと云ば、師のいはく、大形は表に嫌ふべし。事によるべき事ながらいづれとても心嫌也。詞に出さずして心の下に嫌ふ事を持たるは作者清からず。心きたなし。一向にうち出て云たるかた然るべし。されども表の躰にあらざれば常にくるしからず、うち出せといふにはあらずと云り。（しろさうし）

「三七一」

戀の事は一座の宗匠にまかすべしと、先師も遺誡申されし。（續五論、戀論）

「三七二」

卯七・野明曰、蕉門に戀を一句にて捨るはいかゞ。去來曰、予此事を伺ふ。先師曰、古は戀の

句數定らず、敕已後、二句以上五句となる。これ禮式の法なり。一句にて捨ざるは、大切の戀句に挨拶なからんはいかゞとなり。一說に戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨べからずともいへり。皆大切に思ふ故なり。予が一句にても捨よといふも、いよ〳〵大切におもふ故なり。汝は知まじ、昔は戀句出れば相手の作者は、戀をしかけられたりと挨拶せり。また五十員。百員といへども戀句なければ一卷とはいはず、はした物とす。斯ばかり大切なる故、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出れば幸とし、かへつて卷中戀句まれなり。又多くは戀句より句しぶり吟おもく、一卷不出來になれり。この故に戀句出て付よからんときは、二句が五句もすべし。付がたからんときは、しばらく付ずとも、一句にても捨よと云へり。かくいふも何とぞ卷づらをよく、戀句も度〳〵出よかしと思ふ故なり。敕の上を斯く云は恐るゝ所有(ところある)に似たれども、それは連歌の事にて、俳諧の上にあらねば奉背にもあらず。然れども我古人の罪人たる事をまぬかれず。唯後學の作しよからん故をおもひ侍るのみなり。(去來抄、故實)

「三七三」

戀の事を先師云々、むかしより二句結ざれば不レ用也。むかしの句は戀の詞を兼而集メ置、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざる也。いま思ふ所は戀別而大切の事也。なすにやすからず。そのかみ宗砌・宗祇(祇)の比迄一句にて止事例なきにもあらず。此後所〻門人とも談じて、一句にても置べき事もあらんかと也。又ある時云々、前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある

時は、必戀の句を付て前句ともに戀にすべしと也。是には此句のみにてつゞいて戀にも及べからず。新式にも此沙汰あるよし也。しかれども戀の事は分て其座の宗匠に任すべしと也。(しろさうし)

「三七四」

懷紙に戀をなくていかゞしく、むかしより沙汰し來る。なくてかなはざる事か。好む心はいかゞにと云ば、此事は知て大切の事也。懷紙に戀を目立る事、神代より日本はじまるの例也。戀なくては詮なき事也。つゝしむべしと也。(しろさうし)

「三七五」

季にて戀の句をつゝむこと、戀の句にて季の句をつゝむこと、むかしは嫌へども今はくるしからずと也。(くろさうし)

「三七六」

卯七日、猿みの集に、花をさくらにかへらるゝはいかに。去來曰、此時予、花をさくらにかへんと云。先師曰、故いかに。去來曰、凡、花はさくらにあらずといへる、一通りはする事にして、花聟・茶の出花なども、はなやかなるによる。花やかなりといふもよる所有、必竟(畢)花はさくらをのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ。古へは四本の內一本は櫻なり。汝が云ところも故

なきにあらず、兎角作すべし。されど尋常の櫻にては、かわりたる詮なからんとなり。（去來抄、故實）

「三七七」

同（師）いはく、花によし野付ぬ事は、しるて事もなし。たゞ法度のみ也。（くろさうし）

「三七八」

牡丹に芍藥を付る事はあるまじ。是は心の好所にて差合にはあらず。付らるゝ働あらば付て猶よろしかるべしと、師の詞也。萬に此類あるべし。門人心得てすべき事也。（くろさうし）

「三七九」

卯七日、蕉門に宵闇を月に用ひ侍るや。

去來曰、此事あり。洒堂曰、深川の會に宵闇の句出たり。先師曰、宵闇は句中に月あれば、外に月の句作せんは拙なかるべしと、直ちに月にもちひ、さて表に月を見せざらむもいかゞと、月次の月の字を入らるゝといへり。さもあるべきこととおもへり。其後、風國が會に宵闇の句いづる。予曰、先師已に此式を立らるゝ上は、いざ其法にならはんと、是を月に用ひ侍りぬ。この比、許六の書を見るに、先師の宵闇を月にし給ふは故有との事也。然るを何の故もなく月に用るは淺ましとなり。此ことば聞て恥るにたへず。許六は其時深川の會の徒なり。いか樣仔細あるべし。

（去來抄、故實）

「三八〇」

師、ある俳諧の時、宵やみといふ句に月成まじ、是を月にすべしとて秋を付出し、八月と云月次を出せり。月秋の堪所（場カ）によひやみ出合たればこそ、ふしぎの働出たりと、俳書に有。（くろさうし）

註。「宇陀法師」に同旨の文がある。

「三八一」

遺稿ノ秘說に、宵闇の句評の下に、祖翁の遺訓をあげて、秋季に星月夜の設（扱カ）と、歌仙に二花二月の事あり。（十論爲辨抄、第十段）

「三八二」

師のいはく、素（す）秋の事、せぬ方先よろし。するに習ひなし、時によるべし。（くろさうし）

「三八三」

野坡曰、東武の會に盆を釋教とせず。嵐雪是を難ず。先師曰、盆を釋教といはゞ、正月は神祇になるかと也。予、兎角をいはず。退て思ふに此事はいか樣故あらん。一句に釋教なしといふとも、已に盆と呼ばゞ、釋教ならんか。中元といふ類にはあらずと、いとふしんなり。（去來抄、

故實）

「三八四」

旅の事ある俳書に師の曰、連哥に旅の句三句つゞき二句にてするよし。多くゆるすは神祇・釋教・戀・無常の句、旅にてはなるゝ所多し。今、旅・戀、難所にして又一ふし此所にある。旅躰の句はたとひ田舍にてするとも心を都にして、相坂を越へ淀の川舟にのる心持、都の便求る心など本意とすべしとは連の教也。又旅、東海道の一筋もしらぬ人風雅に覺束なしとも云へりと有。（しろさうし。一部分「俳諧一般」の「修行教」に重出）

註。「宇陀法師」にも同旨の文がある。

「三八五」

又古今の人の名、表に出す事いかゞ侍らんとたづねしに、師の云、今の人の名はつゝしむべし。古人の名は物によりてくるしかるまじ。されども好がたし。心嫌也と云り。（しろさうし）

「三八六」

師のいはく、持て來る詞といふあり。ことに人の名などにある事也とぞ。（くろさうし）

「三八七」

（許六云）古事・故實をむすぶ夏、猿みのに諏訪の祭りの穂屋作る夏にて、翁の物がたり有。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

「三八八」

先師曰、發句も四季のみならず、戀・旅・名所・離別等無季の句有たきものなり。されどもいかなる故ありて、四季のみとはさだめ置れけん。其事をしらざれば暫もだし侍るとなり。（蕉門俳諧語錄、上。「發句」の「風體論」に重出）

「三八九」

朝よさを誰松しまの片心

此句は季なし。師の詞にも名所のみ、雜の句にもありたし。季をとりあはせ哥枕を用る、十七文字にはいさゝか心ざし述がたしといへる事も侍る也。さの心にてこの句もありけるか。猶杖つき坂の句有。（あかさうし）

註。「杖つき坂」の句については「三四八」及び「三九〇」を參照。

「三九〇」

（上略）桑名より處〳〵馬に乘て、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。も

の〻便なきひとり旅さへあるを、まさなの乘てやと、馬子にはしかられながら、

かちならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども季の言葉なし。雜の句といはんもあしからじ。（笈日記）

「三九一」

（許六云）當時歳旦の發句と稱して、歳旦にてなき句大分有。師の云、歳旦といふは、元日明渡りたる時の夏也。大方歳旦の句にてはなしと云り。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

「三九二」

としの松・年の何などゝ近年歳旦に用る事あり、いかゞとたづね侍れば、師のいはく、達人のわざにあらず、論に不レ及と也。去年今年春季也。當年といふ事も季に心をなさば成べしと也。（くろさうし）

「三九三」

先師

（去來云）一とせ先師の歳旦、

としゞゝや猿に着せたる猿の面

此句季はいかゞと窺けるに、としゞゝはいかにとの給ふ。いしくも承るもの哉と退ぬ。としは季の詞にあらずや。かくの給ふ處しらるべし。面に季見えずして、季になる句、近年付句等にもほゞ見へ侍る也。（旅寐論）

註。「八六」「二〇二」參照。

「三九四」

魯町曰、竹植る日は古來より季にや。去來曰、不二覺悟一、先師の句にてはじめて見侍る。古來の季ならずとも、季にしかるべき物あらば撰び用ゆべし。先師曰、季節のひとつも探し出したらんは、後世のよき賜となり。鹽かきの夜も古來の季節かしらずといへども、五月三十日なれば夏季に定る。可南が句に沙汰し侍る。（去來抄、故實）

「三九五」

順の峯入・逆の峯入とも夏也。むかし紀の國路よりみねに入て是を順といふ。今はよし野路よりいりて是を逆と云。諸ともの哥、順逆ともに夏故に感ふかしと師の云也。（くろさうし）

「三九六」

呼子鳥の事、師のいはく、季吟老人に對面の時、御傘に春の夕ぐれ稍高くきて鳴鳥と思ひて句をすべしと有。貞德の心いかにとたづねられしに、老人のいはく、貞德も古今傳受の人とは見えず、全句をせざる事也といへるよし、師のはなしあり。（くろさうし）

「三九七」

兒よ鳥、春されば野べに先なく兒よ鳥聲に見へッ、忘れなくに　といふは雉子をよめり。又鶯をもよめり。霜氷る岩根につるゝ兒よ鳥浪の枕やわびてぬるらん　是鶯也。定家卿の云、兒よ

鳥、春の鳥也となり。師の曰、說〻あれども、たゞ春の小鳥のいつくしきをいふと知るべしと也。（くろさうし）

「三九八」

つぼすみれといふは、舊園のすみれ也。つぼの内のすみれといふ事也。一たびよみて詞やさしき、依てすみれの名になして山野にもよめる也。師のいはく、此類の事どもみなある事也とぞ。（くろさうし）

「三九九」

卯七日、發句に切字を入る事は如何。

去來曰、故あり。先師曰、汝切字をしるや。去來曰、いまだ傳授なし、自分覺悟し侍る。先師曰、いかに。去來曰、たとへば發句は一本木のごとしといへども梢　根あり。付句は枝のごとし、大いなりといへども全からず。梢・根ある句は切字の有無によらず、發句の躰なり。先師曰、しかり、然れどもそれは面影をしりたるなり。是を傳授すべし。切字のことは連俳ともに深く秘す、猥に人にかたるべからず。惣て先師に承る事多しといへども、秘すべしと有りしは是のみなれば、其事はしばらく淒慮し侍る。第一は切字を入るゝは句を切ため也。切れたる句は字を以て切に及ばず。いまだ句の切れる、切れざるを知らざる作者のため、先達、切字の數を定られたり。此字

を入るときは十に七八は句切る也。殘二三は入てきれざる句あり、又入れずしてきれる句あり。此故に或はこのやは、口あいのや、このしは、過去のしにてきれず。或は是は三段切、是は何ぎれなどゝて、名目して傳授事なり。又、丈草に向て先師曰、歌は三十一字にて切れ、發句は十七字にて切る。丈草撰入あり。又、或人曰、先師曰、きれ字に用る時は、四十八字皆切字なり。用ざる時は一字もきれ字なしとなり。是等は皆〻こゝをしれと障子ひとへをおしへ給ふなり。去來曰、此事を記す、同門にもみだり成りと思ふ人有らん。愚意は格別也。此事あながち先師の祕し給ふべき事にもあらず、たゞ先師の傳授のとき斯ありし故なるべし。予も祕せよとありけるは書せず、唯此あたりを記して人も推せよとおもひ侍るなり。（去來抄、故實）

「四〇〇」

切字の事、師のいはく、むかしより用ひ來る文字ども用べし。連俳の書に委くある事也。切字なくてはほ句の姿にあらず、付句の躰也。切字を加へても付句の姿ある句あり。誠に切たる句にあらず。又切字なくても切る句有。其分別切字の第一也。その位は自然としらざればしりがたし、猶口傳あり。師常に道を大切にして示されし也。あこくその心はしらず梅の花　と云句をして切字を入る事を案じられし傍にありて、此句は切字なくて切るやうに侍ると云ば、切る也。されども切字はたしかに入たるよし、初心の人の道のまどひに成てあし。つねにつゝしむべし。まして させる事もなき句は、句を思ひやむとも常にたしなむべしと示されし也。（しろさうし）

「四〇一」

連　あなたうと春の日みがく玉津島

此句連哥の大廻しにひかれたれ共大廻しにあらず、五文字にて切たるよし、先師相傳の時申されけり。大事の習也。（宇陀法師）

「四〇二」

芭蕉

からさきの松は花より朧にて

或人、にて留りの難あらんやと云。其角答曰、にては哉にかよふゆゑ、哉留の發句ににて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸曰、にて留の事は其角が解あり、又是は第三の句なり、いかに發句とはなしたまふや。去來曰、是は卽興感偶にて、發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案にわたらば第三等にくだらん。先師重て曰、其角・去來が辨皆理屈なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。（去來抄、先師評。「句評」に重出）

「四〇三」

手爾葉留の發句の事、けり・や等の云結たるはつねにもすべし。覽・て・に、その外いひ殘たる留りは、一代二三句は過分の事成べし。けり留りは至て詞强し。かりそめにいひ出すにあらず。

ふりつみし高根のみゆきとけにけり　といふも至てつよくいひはなして、その響に應じて、清瀧川の鳴りあがる水のしら浪　といひかけて、けしきを顯す也。覽とはねべき所を、やといひ捨るもあり。也といふべきを覽といひて、はゞを取事なども古哥などにも多し。皆句作の所なるべしと師の敎也。（くろさうし）

「四〇四」

一松岡茶店にての句、物書て扇引さく別哉と直し申候。脇てには留メにて候。てには留メは脇にては草にて、神祇、追善、祝義、本式はいかい、貴人の挨拶、すべて我より上たる人のほ句にはせぬ事ニ候。我も只今にてハ其元の師に候間、挨拶の脇ニてには留よろしからず候。外より彼是申もの御座候てハ兩人ともふつゝかに見へ申候。山中問答にも三ツ物の事御尋なく我も心付不レ申候。此度委三ッ物傳別帋にて申入候。是にて第三文字留メ草の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可レ被レ成候。去來、丈草、凡兆、正秀なども問答見たがり申候。脇付替り候ハヾ第三、四句め付て可レ進候。御望の兩吟初可レ申候。（書翰集、北枝宛の一部。元祿二年十月十三日）

「四〇五」

二日にもぬかりはせじな花の春

この句は、元日ひるまでいねてもちくひはづしたりと前書あり。この句の時師の曰、等類氣遣ひなき趣向を得たり。此手爾波は二日にはといふを、にもとは仕たる也。にはといひてはあまり

平目に當りて、聞なく、いやしと也。其角、たびうりにあふうつの山　といふも、あはんといふ所をあふとは云るゝ。喜撰が、人はいふ也の類なるべし。（あかさうし。「句評」に重出）

註。てにをはのことは「三六五」にもある。參照されたい。

一〇　雜

「四〇六」

師說云、選集に撰者の句あまた入事、昔千載集の時再度敕許有て、俊成卿の哥加增せられたる事有。當時俳諧選者憚りなくともゆるすべき事。（宇陀法師）

「四〇七」

古今の序に哥人のうたざまを、おの〳〵難じたるやうに貫之の書なせる也。師のいはく、難じたるにあらず、その人〻の紛骨の所を見顯し賞したる所也。喜撰法師の曉の雲の事・我庵はの哥のすへ、人はいふ也とあるあたり也。いくたびも可レ味と也。（くろさうし）

「四〇八」

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花
　我落にきと人にかたるな

此歌僧正遍昭さが野の落馬の時よめる也。俳諧の手本なり。詞いやしからず心ざれたるを上句とし、詞いやしう心のざれざるを下の句とする也。先師のいはく、いにしへの俳諧哥雜躰あまたな

れども、まめやかに思ひ入たる躰、

おもふてふ人の心のくまごとに
立かくれッ、見るよしもがな

多ながらはるの隣のちかければ
なか垣よりぞ花は咲ける

「四〇九」

師のいはく、定家卿五首の祕哥に、こぬ人を入るといふ説あり。この祕といふはたゞ難なき哥を出したる所をいふと也。撰者の身として、すぐれたる哥もおとなしかるまじとの心遣ひ也。難ある哥も猶いかゞ也。この心得を祕といふとなり。能見せしめ也と師もいへるなり。（くろさうし）

「四一〇」

涙川たえずながるゝうき瀬にもうたかた人にあはで消めや、この哥のうたかたはむしろといふ字・何ンぞといふ字二説あり。義理は何ンぞ也。なんぞ人にあはできへんと也。されども定家卿の云、何ンぞと義理を結（詰カ）て見るべからず、いやしき也。うたかたはたゞ水のことにはんと思ひていへる斗と聞べしと也。亡師も義理を詰るはいやしといへる、おもしろしと也。（くろさうし）

「四一一」

伊勢が哥のとしをへて花の鏡となる水は、とある此五文字なくても、下ばかりにて哥よく聞へたり。此五文字、年〳〵水清くすみて水のかはらざるに、花のちりかゝるを曇といへる也。五文字紛（粉）骨の哥なりと師のいへる也。（くろさうし）

「四一二」

師のいはく、大方の露には何のなりぬらんたもとにおくは涙也けり、此うたは鳴立澤に勝ッ哥也。面白しと也。（くろさうし）

「四一三」

ある禪僧詩の事をたづねられしに、師の曰、詩の事は隱士素堂といふもの、此道にふかき好ものにて人も名をしれる也。かれつねに云、詩は隱者の詩、風雅にて宜と云と也。（くろさうし）

「四一四」

文章の事、師のいはく、惣名を文章といふ也。序に由序・來序・內序といふ三體あり。由は起るよしを書、來は是より先の事を書、內はその書の內の事を書也。此三體をひとつにして序一ッにも書る也。跋はふみとゞまる也。序あつて跋あり。序も跋もその云所同じ。跋は序を猶委しく云たる物也。ふみとまりて委しくするの心也。序・跋ともに年號月を書。五字・七字書は長哥の

格也。七五三など〻地の詞亂に書。あるひは對ある時は必對を置く。古事を置時は古事の對、野山・水邊・生類等おの〳〵對同前也。詞書その書樣和にならひなし。漢には其綾もある事と也。記は其物を記すの心也、格は序跋に同じ。意の違のみ。銘は前に同じ。意の違のみ。讃はほむるの心也。卽山吹に句をする時は山吹をほめて讃也。山吹を褒美の義理也。惣而文章に書時四五字〳〵に書、大かたの格也。（しろさうし）

「四一五」

師のいはく、わが句ども多くの集に書誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづ〻書添て、所〻の哥仙一折宛、是もいがの門人を初として、志を以て書留むべし。號を笈の小文とせん、又小文と斗やすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謠に此事あり。宜集の名と思ひ留たる也。書號によろしきものなど常に見置べし。拙號はあさましき物也。萬に心遣ひ有事也。（くろさうし）

「四一六」

去來曰、先師曰、俳諧の書の名は、和歌・詩文・史錄等とたがひ、作者の名あるべしと也。されば先師名づけ給ふを見るに、みなし栗・三ヶ月日記・冬の日・ひさご・猿蓑・葛松原・笈の小文皆其趣なり。去來、浪化集の時上下を有磯海・となみ山と號す。先師曰、みな和歌の名所なれば、浪化集と呼べしとなり。（去來抄、故實）

「四一七」

先師曰、俳名は穴勝熟字によらず、唯となへ淸く調ひ、字形の風流なるを用ゆべし。短册など書て猶見る所あり。片名書侍るにこと〴〵しき字形は苦しかるべし。はせをは假名に書ての自慢なりとなり。又野明が名をはじめ風仮と云けるを、釵・双の有る字は名に用ゆべからずとて、先師の野明とは改め給ひけり。（去來抄、故實）

「四一八」

去來曰、外題の寸法あり。譬へば表紙の三分一を取り、横五分が一を取とやらん。猿蓑のとき先師の給ひけり。たしかに覺えず。（去來抄、故實）

「四一九」

師のいはく、撰集・懷紙・短尺書習ふべし。書やうはいろ〳〵有べし。たゞさはがしからぬ心遣ひありたしと也。猿みの能筆也。されども今少大也。作者の名大にていやしく見へ侍ると也。（くろさうし）

「四二〇」

能書の物かけるには、哥の詞・手爾葉など違ふ事必あり。ふしぎに思ふべからず。かなゝどのつゞき、時の拍子又書ざま見ぐるしき所、書違へたる事多しと也。（くろさうし）

一一 追補

「四二一」

こゝかしこうかれありきて、橘町といふ所に多ごもりして、睦月・きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめく風雅の魔心なるべし。なを放下して栖を去、腰にたゞ百錢をたくはえて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情終に孤をかぶらんとは。（栖去之辨、全文。「一、心」に編入）

「四二二」

尾陽蓬左、櫃木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひととせ此郷に旅寐せしおり〳〵の云捨、あつめて多の日といふ。其日かげ相續て春の日、また世にかゞやかす。げにや衣更着・やよひの空のけしき、柳・櫻の錦を爭ひ、てふ鳥のをのがさま〴〵なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにゝもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべらし。（曠野集序、全文。「六、俳諧一般」の「イ、本質論」に編入）

「四二三」

翁曰、當時ノ俳諧ハ梨子地ノ器ニ高蒔繪カキタルガゴトシ。テイネイ美ツクセリト雖モ、ヤウヤク飽レ之。予門人ハ桐ノ器ヲカキ合ニヌリタランガ如ク、ザングリト荒ヒテ句作スベシ。（去來の不玉宛論書。「六、俳諧一般」の「ロ、修行敎」に編入）

「四二四」

或人俳諧ノ新味ヲ問フ。翁曰、鴻鴈ノ羹ヲステ、芳草ノ汁ヲスヽレ。或曰、芳草ノ汁ノ何ンゾ鴻鴈ニ敵スル事ヲ得ンヤ。翁笑テ答ヱ玉ハズ。去來側ニ侍リテ曰、宜ナル哉、汝ガ鴻鴈ニ飽ザル事。予イマダ汝ガ鴻鴈ヲ食シタルヲ見ズ。只日夜其肉ヲ願フノミ。（去來の不玉宛論書。「六、俳諧一般」の「ロ、修行敎」に編入）

「四二五」

翁曰、俳諧ニ暫クモ住スベカラズ。住スル時ハ重シ。（去來の不玉宛論書。「六、俳諧一般」の「ロ、修行敎」に編入）

「四二六」

膳所ノ酒堂ガ句ニ

日ノ影ヤゴモクノ上ノ親雀

二三子笑テ曰、此只事也。發句ト云ガタシ。翁聞レ之曰、二三子ノ此句ヲ笑ハイマダ此場ヲ不レ蹈也。右ノ句ヲ以テ好レ輕惡レ重ノ差別ヲ考ヘ給ヘ。尙如レ此ノ事コトヽヽク盡シ難シ。暫ク筆ヲ指ヲク。（去來の不玉宛論書。「七、發句」の「ハ、句評」に編入）

（追記）右の追補の中、「去來の不玉宛論書」は、岩波文庫本「去來抄・三册子・旅寢論」の去來抄の解說に收載されてある「再稿」の方に據つたものである。但し讀み易くする爲に濁點を補つておいた。「去來の不玉宛論書」は、芭蕉の「かるみ」についての考を祖述する去來の論として、極めて重視すべきものであるが、引かれてある芭蕉の言葉の多くは、去來抄其の他にそれと同樣の趣旨のものが見えてをる。追補に收めたのは他書に見えない芭蕉の言葉だけである。

猶芭蕉の書翰に就いては、既に凡例に述べてある如く、眞僞の檢討の餘裕もなかつたので、比較的信憑するに足る岩波文庫本の「勝峯晋風編芭蕉書翰集」中の、勝峯氏が「確實性あるもの」とされてをるものに據つたのであるが、その後考へてみるのに、本書收載の「一三六」「二二六」「二二八」「二四三」「二四八」「二七二」等の書翰は、むしろ僞作とすべきものかと思ふ。猶「八一」の書翰も稍疑はしい點がある。この機會に併せて誌しておく次第である。

再刷に際して

編者

索引

索引に就いて

索引を分つて「語句索引」「句索引」の二とする。排列は五十音順に從つた。以下「語句索引」「句索引」について、少しく説明を加へたい。

一、語句索引に就いて

先づ語句索引としては、各篇の文の主題、若しくは内容の標識となるが如き語句を、本文の頁の順に依つて掲出した。而して夫等は、本文中の語句をそのまゝとり用ひることを原則としたが、中には多少簡略化したり、補足したりしたのもあるし、或は二篇の文中の語句を綜合したりしたのもある。又本文中の語句に依らずに、筆者が適當な主題を設けて掲出したのも稀にあるが、それには括弧を附しておいた。

各篇の文には夫々一つの主題を設けることを原則としたが、相當長文のものは、内容を二三の主題に分けて見られるのもあるし、又同一範圍の文にしても、別個の觀點から主題を異にしてみられるのもあるし、更に又包括的主題の下に、小い主題をおいて見られるのもある。依つて夫等の顯著な場合にあつては、一つの文について二三の主題を掲出したのもある。逆に又、包括的な主題を設けて、その主題下に二三の文が收められてある場合もある。文に依つては又、主題の掲

出を省略したのも相當ある。例へば發句評の如きは、言はゞ發句が主題なのであるから、夫等は句索引に發句を掲出したのに止めたものが多い。

本書は既に序や凡例に述べてある如く、芭蕉の俳諧論を體系づけ組織づけたもので、從つて文の排列は主題に依つてなされたものであるが、右に説明した主題の索引は、目次として掲出してある本書の組織を示す項目に隷屬しその補助的な機能をなすものである。

語句索引としては、右に次いで行を一行空けて、國文學もしくは俳諧に於て、特に注意を要すると思はれる用語を掲出した。では如何なる言葉を右の如く考へるか。そこに多少の筆者自身の見解を否むことは出來ぬと思ふ。之は既に主題の設定に於ても同樣である。索引は一見機械的な勞作に止るかに見えて、必しも然らざるを知るのである。この點大方の御諒恕を願はなければならない。

扨て用語の索引については、左の諸件をお含みの上、御利用願ひたい。

(イ)「風雅」「不易流行」「虚實」「さび、しをり、ほそみ」の項に於ける、夫等の用語は、その項に當然出てくべき筈のものであるから、之を省略し、(但し「風雅のまこと」の如く他の語と結んで用ひられてある場合は、この限りでない。)他の項に於けるものだけを掲出した。又主題の索引として既に示されてある處に盡きるものも、之を省略した。依つて用語の檢出に當つては、その言葉を掲げてある目次の部分は勿論、同じ項に於ける主題索引(花なら「は」の主題索引)も

一應見ていたゞきたい。

(ロ)活用語は、それが種々の形に於て示されてゐるものは、終止形に統一して掲出した。例へば「をかしく」「をかしき」「をかしけれ」を「をかし」として掲出せる如きである。但し「あはれなり」は形容動詞として示すべきかもしれないが、切りはなして「あはれ」として掲出した。又假名遣も、多樣になつてゐる場合は、正しい方に統一して示しておいた。例へば「おかし」を「をかし」として示せる如きである。(事實は「おかし」の方が遙に多かつた。)次に假名漢字兩樣に示されてあるものは、その一方に統一して掲出した。體は、風體といふ場合は「テイ」であるが、單獨に使用した場合は「タイ」と讀む場合が多いやうに考へるので「た」の項に纏めておいた。

(ハ)一々列擧する煩は避けるが、用語に依つては、(イ)に該當せざる限り、その全部を網羅したものもあるし、又用法に依つて取捨したものもある。例へば前述の「體」の如きも、それが「樣式」或はそれに近い意味でなしに、單に「有樣」とか「樣子」とかいふやうな意味に使用されてゐる場合は、之を省略せる如きである。

(ニ)人名は、その個人について、何等かの意味に於て注意に價することが言はれてある場合に限り、之を索引に示した。從つて單に句の作者として示されてゐる場合の如きは、全部之を省略した。又同一人にして、二三の名に於て示されてある場合は、之を一つに統一して示した。例へば「角」「晋子」等は「其角」として示せる如きである。

猶ほ主題の索引にしろ、用語の索引にしろ、主として連句に關する語であることを、常識的に判斷しかねると思はれるものは、下に（連）と記入し、或は連と傍書しておいた。又主題索引のみで、用語索引のなき項は、終りを一行空け、用語索引のみで、主題索引のなき項は、初めを一行空けておいた。

右に説明せる如き主題索引・用語索引を含めての「語句索引」の組織は、稍型破りでもあり、一面又煩雜の嫌ひも多少あるかもしれないが、本書を構成する各部の機能を活かし、全體的機構を完からしめたいために、敢て之をなしたものである。

二、句索引に就いて

句索引は「發句」「附句」の索引とする。先づ發句の索引を掲出し、一行あけて附句の索引を示した。而して何れも本文に掲載されてある頁の順に依り、全句を擧げずに上の句を擧げるのに止めたが、上の句が同樣のもの二つ以上ある時は、次の句も記した。又句が明示されてゐない場合は括孤を附して之を示しておいた。

又その項に、發句のみで附句のない場合は、終りを一行あけ、發句のない場合は初めを一行あけておいた。

語句索引

あ

新みは俳諧の花　三六
（新しき俳諧の提唱）　四六
新敷俳諧の本意　四七
相似たる句は　七三
揚句のこと　二六〇
あだなる處　二一四
あはれ　二一　二四　二八　四七　一一八　一三三　一七三　一八三　一九三　一九四　一七九　二〇〇　二〇四　二一一　二一三　二四一　二四三　二四四　二四六
甘味　二三八
雨（連）　二六〇

い

今より五十年の變をまちて　五七
いよ〳〵風體輕く移り行ん　五七
いき過　六六　一〇三
一風に長くとゞまるまじき事　六九
いひ課て何かある　一〇四
一座の人にとれて句をそこなふ事あり　一〇六
一體ならんは見苦し（連）　二二五
今思ふ體は輕きなり　二二四
一時流行　二六　二九　三六
幽玄　一八四　二三八
幽　二〇七　二四二

う

（鵜匠の繩をさばくが如くせよ）　七〇
裏一順の事　二六〇
移り　五二　二五　二七
うつろひ　二三二

え

艷　九八　二二四

お

落つかざれば眞の發句にめらず　九〇
面影にて附ること　二二七
笈の小文のこと　二七八
おもみ　九〇
おもし　一二六
大付　二五八
大廻し　二七二
おもかげ（連）　二二七　二二八　二二九
思ひなし（連）　二二八　二二九
笈の小文　六四
應安の式　五五

か

歌仙は三十六歩也　二五
格は句よりはなるゝ也　二三
歌仙の作法　二五七
歌仙の式法　二六〇
皃よ鳥の事　二六九
かるみ　一一七 二三三 二三五 二三六 二三八
かろし（かるし）　五七 一一八 二三四 二三九
かろ〳〵と　二四一 二四三 二五七 二五九
からぶ　二六〇
かけり　一九一 二二二
格高し　一二八 一五〇 二一七
閑寂　二二八
八一

き

虚にゐて實をおこなふべし　四〇
昨日の我に飽たり　六九
其角評　五五 六七 七八 八一
去來評　七八
（去來と越人）　七八
許六評　八〇—八五
（許六と其角）　八一
聞えぬ句　九八
季をとり合するに、句のふる
びやすき類有　九七
切字の事　一一三 二〇八 二五八 二七〇 二七一 二七二
季の差合　二〇四
氣變に任すべし　二二三
季と戀　二六三
季のこと　二六八 二六九
義理を詰るはいやし　二七六
虚實　五一 六八
虚　二〇三
季　二〇四 二二三 二五八 二五九 二六〇
其角　二六三 二六七 二六八 二六九
六六 六七 六九 七六 二三四
去來　七八 二二九
許六　五九 八〇—八五
曲翠　六三
季吟　二六九

く

愚老が俳諧四五年の後は
句を聞事のおろそかなる故なり　五六
句の上品、中品　七二
句の位　八九
句の姿　八九
句勢　九〇
句は數寄屋を立たる如し　九〇
句のすがたは青柳の小雨にう
たれたるが如く　九二
句とゝのはずんば舌頭に千轉
せよ　九二
句に拍子有てよからず　九三
句は手づよく俳意たしかに作す
べし　九三

句にしをりの有やうに作るべし　九四
句作のいきやう　九九
句評之事　九九
（句作の心得一班）　九九
句作になるとするとあり　一〇五
句は天下の人にかなへる事は
やすし　一〇六
位のこと（連）　二一六 二二一
句毎に季のなき發句をすると
思へ　二二四
花實　二八
位　四二 五二 六九 八九 九五 一四四
二一六 二二一 二二九 二五七 二七一
句調たかし　二二一
觀相　二四一

け

乾坤の變は風雅のたね　二六
景氣の句　九一
氣色はいかほどつゞけてもよし　二二一
外題の寸法　二七九
景曲　二七 九一
景氣　九一 二〇四 二〇八 二一九
二二九 二四三 二四八
氣色　二〇五 二〇七 二一一 二二二 二二三
二二九 二三〇 二三四 二三六 二七三
玄　二〇七
血脈　三〇 八一 八五 一四八

こ

此一筋につながる
詞の作好べからず　二一
この道に古人なし　四三
古人の涎をなむることなかれ　五二 五三 五四 五五
古人に拘るべき軌則なし　五五
五七年も過はべらば又一變あ
らむ　五六
心の俳諧肝要　五八
心のごとく聞なし侍らんは本
意なし　七三
心の作はよし、詞の作好べか
らず　九八
是こそ發句なれ　一〇一
五六分の句はいつまでも聞あ
かず　一〇三
こしやくに成候はゞ　二二五
こまかに付侍るはわろし（連）　二四五
（戀、述懷、祝言等のこと）　二六一
戀、無常、其外嫌ふ古事（連）　二六一
戀の事（連）　二六一 二六二 二六三
古今の人の名を表に出す事　二六六
古事故實をむすぶ事　二六七
（古今集序につきて）　二七五
心附　五二
戀（發句）　九一
戀（連）　二五九 二六〇 二六一 二六二
二六三 二六六 二六七

戀の花（連）　二五九
御傘　二六九

さ

（さびとしをり）　四一
さび　四三
作を捨て、作ある所を好む　五九
細工して拙き事云べからず
算用を合せたる句　九八
三十六句皆やり句　一〇〇
差合の事　二三二
指合、てにはの事　二五五　二五六　二五七
歳旦のこと　二五六
　　二六八
さび　四〇
さび色　四三
さぶ　一七六　一九一
さびし　一七七　一九〇　一九一　二二二　二四八
淋しさ　一七三　一九九
差合　二五五　二五六　二五七　二五九　二六四

西行　二六　四七　五五　六三
西鶴　五八

し

師常に我を忘れず　二六
（しをりと細み）　二三
しをり　四三
秀逸の句三五あらん人は誹者也　四三
支考評　六四
私意をやぶる　八六
（瞬間にいひとむべし）　一〇五
趣向を句のふりに振出す　一〇五
字餘りの句のこと　二一〇
四句め六句めにふり有事　二二五
（支考芭蕉の附を疑ひしこと）　二二七
四句めのこと　二五九
鹽かきの夜　二六九
順の峯入、逆の峯入　二六九
詩のこと　二七七
書號のこと　二七八

實　四七　五三　六四　七一　八七　二〇三　二八一
しほる　二四一
しほりめく　二四一
正風　三一
正風躰　三七　一〇三
四春八木（連）　二五九
正花　二六〇
神祇（連）　二五八　二五九　二六六　二七三
釋教（連）　二五八　二六五　二六六
心敬僧都の私語　二一九
新式　二五五　二五六　二五九　二六三

す

姿の上をとらず　五八
すがたをよく作り、尤意味深甚
　成事第一　九二
（推敲改作の句例）　一四〇—一四八
素秋の事（連）　二六五

推量（連）　二一七
す秋（連）　二五九　二六五

せ

世道俳道二つなき處　二四
世上の俳諧二三躰に過ず　五三
專吟餞別之詞　八八
絶景にむかふ時は　一〇八
選集に選者の句あまた入事　二七五
選集、懷紙、短尺書習ふべし　二七九

千歳不易　二六　二九　三五　三六
雪舟　二六
正秀　二五

そ

其貴道する物は一なり　二六
宗因は此道中興開山　五五
宗鑑の讃　七四
素堂評　七五
その信をしれ　九七
それを何とて句になさゞるや　一〇一　一〇二
底をぬく　六〇
宗砌　二六一
宗祇　二六　七三　二五八　二六〇　二六二
宗長　二六〇
宗鑑　五五　七三　七四
宗因　三三　二六　五三　五五
會良　七一

た

たゞ正風と變風の名也　三一
田にし取鳥は全く俳諧也　四六
たゞ來者を恐る　五四　五五
たゞ子供のする事に心をつけよ　六八
（旅と風雅）　七一
（旅のすゝめ）　七一
題の心たしかに　九四
（題としての時鳥と鶯）　一〇八
體格は定がたし　二三
第三のこと（連）　二五八　二五九
旅の事（連）　二六六
竹植る日　二六九
體　二四　三五　二六　五一　五三　九一　一八三　二二四　二五九　二七六
伊達　八一
長高し　一一六　一八二　二一〇　二三九　二五八
たけもゆたかに　二〇八
立のびて　一六五
旅　七一　二六六　二六七
桃隣　七九　二三四
第三（連）　二七二

ち

丈草評　七九

つ

作り過たるは道に叶はず　六七
附合は老吟のほね　八八
附句は三變　二二五
付といふ筋は　二二七
付は三ツに究まる　二二九
附合十七體のこと　二二九　二三〇
附物にて附る事　二三一
附句も一座の遲速を見合すべし　二三三
月のこと（連）　二五九
つぼすみれ　二七〇
附物　五三　二三一
月（連）　二五七　二五九　二六〇　二六四　二六五
貫之　五二　二七五

て

貞德の讃　七四
手帳らしき句　一〇〇
てにをはのこと
定家卿祕歌のこと　二七二　二七三　二七六

手帳
定家　五〇　五五　六三　七七　一〇〇　二三四　二三五
貞德　一一〇　二六九　二七六　七四　二六九

と

等類のこと　一〇九　一一〇
等類氣遣ひなき趣向　一一三
等類の句例　一四八—一五一
留のこと　二五八　二五九　二七二　二七三

な

何を求てか古風をしたはむ　五五
懷しく云とるべし　五九
梨子くふ口つき（俳諧の呼吸）　六五
なら茶三石喰ふて後俳諧の意味をしるべし　七三

に

匂ひ　三六　五二　一四一　一五一　一五二　一五三　一九五　一九八　二二五　二二六　二二七　二三四　二四三
にほひの花（連）　二六〇
二花二月（連）　二五六
廿五ケ條の口訣　二五六
二條良基　二五六

の

能書の物書るやうに行むとすれば　六七
能書の物かけるには　二八〇

は

俳諧はなくてもありぬべし　二四　二五
俳諧は世の變相にして、風雅は志の行ところ　二七
俳はいたらずと云所なし　四九
俳諧ならざる事更になし　四九

俳諧は今日の平話を用ゆ　四八　四九
俳諧は平話の新しみを本意とす　五〇
俳諧は俗談平話をしり、之を正す也　五〇
俳諧いまだ俵口をとかず　五三
俳諧は教てならざる所あり　五九
俳諧といふに三ツ品あり　六二
俳諧は氣にのせてすべし　六四　六五
俳諧は氣鋒にて無分別に作すべし　六五
俳諧は三尺の童にさせよ　六四
俳諧盡きむ　六六
俳諧能過たり　六六
俳諧はあからさまなるがよし　六八
俳諧は上手に迂詐をつく事　六八
花よほとゝぎすと貪戾なかれ（芭蕉と其角）　七七　八一　一三五
俳諧におゐては老翁が骨髓　八八
腹に戰ものいまだ有　一〇五
俳諧のよしあしは一座の囃方によるべし　一〇六

はしり
走（連）　二一七
俳諧付やう三ツに極る　二二八
俳諧之連歌はよく付といふ字意　二二九
花のこと（連）　二五九　二六〇
花と櫻　二六三
花によし野付ぬ事　二六四
俳名のこと　二七九

萬代不易　二八
花（花實の花）　三六　三八
花（連）　二六一
俳諧の誠　四九
俳諧の底　六〇　八三　八四
俳諧自由　一五〇
俳無言　二五五　二五六
はゞを取　二七三

ひ

百尺竿頭にて中返り　六七
響のこと　二五　二七

人の句前にて趣向を沙汰することこと　二二三
響　五二　二二五　二二六　二二七　二二九

ふ

風雅の流行は天地とともにうつりて、つきぬを尊ぶべし　二七
不易流行其元一なり　二八　二九
（不易流行と血脈）　三〇
不易流行の二つならでは外になし　三一
（不易流行の成立過程）　三三
（不易流行と風體）　三三　三五　三六
（不易もはやれば流行）　三四
不易にして流行　三七
不易の句例　三三　三七
風體輕く移り行ん　五七　六五
風雅の三等　六二
文臺と我と間に髮をいれず、

文臺おろせば卽反古　六四
不卜評　八七
ふと云てよろしき句　一〇一
古みをとらんとせし　一〇五
文章の事　二七七

風雅　三九　四一　四五　四七　四九　五〇　五三　六一　六二　六三　七一　七四　七八　七九　八一　八四　八五　八六　八七　九二　一一六　一二四　一三一　二一七　二三五　二三七　二七七　二八一
風雅のまこと　二六　六九
風流　二七　三八　四〇　七二　七六　八一　九二　九九　一一三　一二五　一二九　一三一　一七二　一九八　二〇七　二三三　二三九　二四二　二四三　二四六　二五四　二七九
風狂　四〇　二三三
風體　五四　五七　六五　二〇七
風　三五　三六　三七　六九　二五五

へ

閉關之說　二

ほ

ほそみ　四一
外藝に達したる人ははやく俳諧に入る　六四
發句の事は行て歸る心の味也　九五
發句はとり合物　九五　九六
發句は題の中より出づること少し　九五　一〇五
發句は一物の上になき物にあらず　九六
發句はこがねを打のべたるやうにありたし　九六
發句はくまゞまでいひつくすものにあらず　一〇四
發句心に持行事あり　一〇七
發句に目立たる事は（連）　二三五
（法式に對する芭蕉の見解）　二五五　二五六
發句の事（連）　二五七

牡丹に芍藥を付る事　二六四
盆と釋教（連）　二六五

本意　四七　五〇　一二五　一七四　二六六
細し　四七　八一　一九一　二一二
星月夜（連）　二五九　二六五

ま

誠の俳諧して　五八
松の事は松に習へ　六八
前句を添て付心の顯るゝことなどならひ見るべし　二三三
前句のけしきを探らず、未錬の事なり　二三九
誠の俳諧　五三　五八

み

未來記の一言　五七
（道に入り難き人と至り易き

人）　五九
見樣體の句　九一
道にすゝむ者の勸る所　一〇八

む

無常の觀　二三
無季の句有たきものなり　九一　二六七
結び題の發句　一〇八
無常（連）　二六六

め

名人の上にも仕損じあり　六一
名人は危所に遊ぶ　六一
目をもて俳諧を見るべし　七〇
（名所の句の心得）　九七

も

物の實をしる事　七一
守武の讃　七四
物がたりの體の句　九一
物の見えたるひかり心にきえざる中にいひとむべし　一〇五
（門弟の三ツ物五ツ物評）　二三四
持て來る詞といふこと　二六六

や

樣體　二三九
野坡　二三五
八雲御抄　二五七

よ

予が風雅は　四七
宵闇と月のこと（連）　二六四　二六五
呼子鳥の事　二六九

ら

嵐蘭を悼む辭　八七
嵐雪　二三四

り

（臨終の述懷）　二三
流行の句例　二四　二七
流行のおなじからざるも、又相はげむたより　六九
流行　五五　六〇　六九
利休　二六

れ

連句に糞尿のこと如何　二三八
（連歌と俳諧との作法一班）　二五七

わ

我道は　四八
我家の俳諧は　四八
脇のこと　二五七　二五八

佗　三九　一九一
佗し　七五
佗ぶ　一七五　一七七　一九三　二二四　二四〇　二四九　二五二
佗助　一九三
和歌三躰　一九一

ゐ

（維然を導く）　六五

ゑ

越人評　八六

を

をかし　一一七　一二〇　一四七　一五五　一六四　一七〇　一七一　一七七　一七九　一八七　一九二　一九七　二〇〇　二〇七　二一一　二二五

句索引

あ

あさがほや　三一　二一〇
あなむざんやな　三三
あれは松　三三
秋の風　二四
青柳の　三七
赤人の　二六　二二五
秋ちかき　一二八
海士の家は　一二八
保風の　一三〇
有明や　一三四
明ぼのや白魚白き　一四三
兄分に　一五三
扇もや　一六〇
編笠に　一七七
青柳に　一八三
秋の心　一八九
青わさび　一九六
あへて此　二〇〇
朝顔の　二〇一
霰やは　二〇五
あけぼのや霜にかぶなの　二一〇
あじろ木の　二一三
あかつきの　二二四
荒〳〵て　二六七
朝よさを　二七一
あこくその　二七二
蜑の子なれば　二八
尼に成べき　二八
青みたる　二八
綾の寐まきに　二八
朝がほに　二八
淺芽生に　二九
秋の山　二九
朝まだき　二四〇
淺ましく　二四一
有明の　二四一
あられ月夜の　二四四
近江の田植　二四五
雨さへぞ　二四七
あら野の牧の　二四八
青淵に　二五〇
秋風は　二五一
あはれに作る　二五三
あかねをしぼる　二五四
あなたうと　二七三

い

磯際に　六五
稲妻を　一〇四
一に俵　一一三
（いそがしやたびうりにあふ）　一一三
糸ざくら　一一六
岩鼻や　一二九
いそがしや沖のしぐれの　二二四

犬の鈴や　一七〇
今案ズルニ　一八三
石の枕に　一八七
芋をうへて　一九〇
今引も　一九四
轟は山を　二〇二
岩もる水　二〇二
いづれ狸　二〇九
何方に　二一三
一寸の蚊の　六七
いのちうれしき　二一八
今はやる　二二三
芋畝の　二二三
市人に　二二三
命を甲斐の　二二三
石の戸樋　二二四
稲妻の　二二八

う

梅の花　一七〇
うき人の　一八三
うらやまし　一八七
卯の花の　一九〇
うの花に　一九四
馬に猩て　二〇二
梅若菜　二〇二
うき草を　二〇九
うつくしき　二一三
鶯に　六五
梅か香に昔の一字　六六
鶯や雀よけ行　八九
うづくまる　九三
梅か香にのつと日の出る　九三
鶯や竹の子藪に　一〇一
上野以來　一〇一
牛馬の　一〇九
うたへるや　一一七
黄鳥の玉子じゃとおしゃる　一二八
温のめと　一三三
うたゝねや　一三三
獨活の千年　一三三
馬かりて　一三三
打あくるごと　一三五
上置の　一三五
馬に出ぬ日は　一三八
梅にすゞめの　一四一
うき世の露を　一四一
うつくしかれと　一四五

え

海老肥て　一四四
襟卷に　一五六

お

永祿は　一五〇
應〳〵と　一五五
御命講や　一五五
大原や　一六〇
御子良子の　一六三
阿蘭陀も　一七〇
佛や　一七七
大としを　一八〇
面桃や　一八〇
落葉とて　一八〇
落つかぬ　一八〇
親と子の　一八〇
大橋を　一八〇
思はぬ方に　一八〇
御頭へ　一八〇

か

角樽や　一八三
壁の麥　一八六
上下や　一八七
寒菊の　一八七
かけ橋の　一八七
枯枝に　一八七
元日や疊の上の　一八七
辛崎の　一八七
川風や　一八七
帷子を　一八七
かり寢せん　一八七
鎌倉を　一八七
からざけも　一八七
風色や　一八七
かげろふの　一八七
皃に似ぬ　一八七
元日や家中の禮は　一八七
鎌できる　一八七
蚊やり火にわれも大賢が　一八七
かゝばやな　一八七
かぶけるは　一八七
から臼の　一八七
かし馬の　一八七
かねぞ嵐　一八七
歸雁　一八七
鉦カン〳〵　一八七
蚊遣り火に夕顔白し　一八七
金藏の　一八七
閑居の糠みそ　一八七
影うらむや毛虫　一八七
かれ〴〵ナルや　一八七
鴨くはで　一八七
風に來て　一八七
歩行ならば　一八七（一八七）

き

鎌倉山に　一八七
かげろふいさむ　一八七
かゝれとて　一八七
門は魚ほす　一八七
髪はそらねど　一八七
鐘ついて　一八七
きられたる　一八七
君が眷　一八七

礎ちちて　一一〇
木のもとは　一一七
兄弟の　一二三
桐の木に　一三〇
霧しぐれ　一三二
菊鶏頭　一三七
清瀧や　一四八
紀路行　一五一
きゃん伽羅の　一五五
きても見よ　一五七
きかぬとぞ　一七三
氣力なき　一七六
霧汐畑　一八九
砧の町　一八九
きり蔓の　一九九
消殘る　一五五
桐の木高く　二三一
銀の小鍋に　二五二

く

唇に　二四
鞍つぼに　一三五
くる春や　一七一
栗かきや　一七八
草すでに　一九四
くれ緣に　二六
内藏の頭かと　二八
くろみて高き　二〇九

け

毛衣に　九六
今朝の秋　一七三
今日にかはる　一八五
罌子咲て　二四四

こ

これは〳〵　三三　一七三
此心　八六
駒奪の　一〇〇
此木戸や　一二二
（霽かれて嶺のは白し）　一三五
木枯の地まで落さぬ　一四〇
木枯に　一四〇　一四一
風の地にも落さぬ　一四一
紅梅の　一五三
小六方の　一九
風となりぬ　一九
火燵のうたゝねや　一九二
風の風　二〇五
子を連て　二一〇
こしはりに　二五一
小畑もちかし　二五三

さ

五月雨に鳩の浮巢を　四六

饗餞も　九八
さみだれや顔もまくらも　二六
五月雨にかくれぬ物や　二六
さみだれや蠶わづらふ　二九
さかる猫は　二四
佐男鹿の　二四
酒の醉や　二六
掃除して　二六
酒ぞ春　二九
さびしさや　二三
さぞふき出　二三
櫻狩　二七
さゝで柴の戸　二四
鯖にとりず　二六
澤苣や　二八
櫻蔕蔕　二九
五月雨のよそに　二〇〇
里芋の　二〇一
草庵に　二一七
咲花にかき出す椽の　二九
咲花に小き門を　二〇
酒の戸たゝく　二三
酒の幌に　二四
里〳〵の　二四
さく日より　二六
酒もりいさむ　二九
鞘ばしりしを　二三

し

霜月や　二七
蛇のすしや　二四
白雲に　二八
椎の花の　二三
じだらくに　二九
下臥に　二七
白桃や　二〇〇
鹿鯛の　二〇一
下京や　二〇四
しら菊の　二一八
蒼蒲刀　一九
鹿をしも　二四
しつぽとや　二五
しぐるおと　二六
しやうことが　二七
燭臺や　二八
しぐれけり　二九
しぐれに色　二〇
しのもみや　二一
芝物の　二七
時雨霞松　二七
詩人ゆるせ　二一
しほらしき　二六
賤が契は　二六
しぐれ　二六
霧浪の音　二〇四
霜深し　二〇九
汐さしかゝる　二六
しづかに醉て　二九
柴かりこかす　二四七（二四八）
　　二四三
　　二五〇

四五代貧を　二五一
しろきたもとの　二五二
鳴ふたつ　二五三

す

摺鉢の　二六
摺子木も　二五
杉の木に　二六五
水仙や　二三
涼しさを　二二七
すゞしさの指圖にみゆる　二二七
涼しさの野山にみつる　二四六
すだれごしの　一六一
炭の荷や　一六九
炭がしら　一六九
炭燒や　一六九
須磨の浦　一七七
鈴鴨の　二二一
煤とりて　二二三

角前髪の　一〇二
すつぺりと　二二八
須磨の鼠の　二二〇
炭竈こねて　二四〇
醉狂人と　二四四

せ

聖靈と　二三
せりやきや　一〇一
芹とる翁　一九
雪村が　二二〇
そ　二二三
そこでさせ　二四四
損也夢　二四〇
俗にいふ　二四四
袖の露も　二五二

た

旅に病で　二三
靈棚の　一〇一
たれやらが　一九
（誰人か）　二二〇
田のへりの　二二三
薪とも　二二四
長の立　二二五
旅人と　二二四
鱈舟や　一四七
たぐりよせん　一六六
種ならば　一六六
だひ〳〵を　二二九
大根生る　二〇三
　二〇六
竹格子　二二九
糺の飴屋　二四八
手まくらに　二五二

ち

粽結ふ　九一
丈六の　一四三
茶の花や　一五一
ちよいと乘　一六二
散花や　一七二
茶僧月を見るに　二〇二

つ

月に柄を　二三
月花の　一七四
蘿の葉の……　一〇四
つかみあふ　一二三
葛の葉のおつるの儘　二二〇
月雪や　二四〇
月日の栗鼠　一五一
妻戀の　一五四
月の舟や　一六一
月の雲間　一六一
つまはづれ　一七四
露消て　一八二
月のさそふ　一八八
氷筋のごとし　二〇六
つは咲や　二二二
頭巾きぬ　二二三
妻よぶ雉子の　九〇
月もなき　二〇二
月影に　二二八
角のとがらぬ　二二三
鶴の頭を　二二四
蔦の葉は　二二七
月くらき　二二七
つくしまで　二二七
つれなきひじり　二四六
月はるゝ　二四九
露まづはらふ　二五一
つき小袖　二五二

て

手をはなつ　一五
丁稚が擔ふ　二六
敵寄せ來る　二四一
寺に使を　二五四

と

鳥どもも　四二
十圓子も　四二　八〇
とし〳〵や　六一　二二　二六八
泥龜や　七二
時なる哉移　一四五
取やげば〳〵が　一六五
としぞ暮　一八一
德利狂人　一八四
鶯に乘て　一八四
鳥もさへづる　二二六

殿守が　二四三
とく起て　二四六
友よぶ蟾の　二四七

な

猶見たし　二三〇
何に此　二三五
なまぐさし　二三六
なく聲や　二五三
啼さわげ　二五七
菜めしより　二七五
なんにも山　二八三
菜摘近し　二八五
何と夏羽織　二八六
何を音に　二八九
眺メ送る　二九一
啼千鳥　二九四
流るゝ年の哀　

なく〳〵も　二六八
中連子　二三九
泣事の　二三三
仲綱が　二四四

に

鶏や　二六〇
にほひある　二五一
如意輪の像の　二三六
につと朝日に　二四四
憎まれし　二三八
　　二四一

ぬ

ぬしやたれ　二四〇

ね

鼠は舟を　二二〇

念佛に狂ふ　二四〇

の

野を横に　二九九
のり弓や　二七二

乗掛の　二六〇
後住女　二五一
法の土　二四四
長閑さや　二四三
　　二三三

は

花にうき世　二四
花に水　二三
花守や　二四三
春風や　二九一
馬上眠からんとして　二九三
八朔や淺黄の紋の　二四四
八朔や上着下着を　二九五
春風にこかすな雛の　二二四

花鳥の　二七
はななりし　二八
花咲て　二九
ばせを葉は　二三
春立や　二四二
花盛　二五〇
春の歌や　二五二
春風になれそなれれそ　二六六
半夜させやあ　二六二
はな息も　二六三
花の香や　二七二
春の水や　二八二
はやなりぬ　二九五
花よりも　二九五
防風ゆるく吹て　二〇五
はづかしや　二二三
鉢たゝき　
半分は　二二八
放す所に　二二四

はづかしの記を　二四二
はしは小雨を　二四三
はげたる眉を　二四四
葉分の風を　二四四
花野に高き　二五〇
蓮のいと　二五二
花の香に　二五二
春をのこせる　二五二
疱瘡は　二五二
初發心　二五二

ひ

人先に　二四
日の道や　二四三
一おねは　二四四
雲雀鳴　二四四
一とせに　二五〇
日の春を　二五二
髭生て　二五二
病鴈の　二五二

火桶抱て　二六六
ひや〳〵と　二六六
一聲の　二四
日〻記や　二八〇
引かへつ　二八二
日ノ影　二八二
人聲の　二二〇
人あまた　二六九
非藏人なる　二五二
ひと雨ごとに　二五二

ふ

（古池や蛙飛こむ）　四九　一四〇
二日にも　九二　二三
冬籠　九七　二七
ふり賣の　二六　二七
振舞や　二七　二六六
ふすべられ　二三　二六八
降つもる　二六　二六六
二人ねの　二六　二七

分限者に　一九
古そばや　二〇一
麩といふもの有　二〇六

冬の朝日の　四七
文庫から　六七
船に茶の湯の　七六
ふるふがごとく　九〇
船にわづらふ　一〇〇
冬さし籠る　一〇二
舟追のけて　二九
奉行の槍に　三六
二ツにわれし　三九
奉行の鎚に　三三
分別なしに　三八

へ

蛇くふと　一七

ほ

蓬萊に　一二
ほとゝぎす啼や五尺の　一三六
ほとゝぎす聲横たふや　一四一
時鳥谷から峰から　一五六
ほの上も　一六三
ぼんのくぼに　一七三
ほとゝぎす家隆のうそや　一八五
干大根　一九七
暮山の雨　二〇三

發心の　二一八
ぼんとぬけたる　二三九
細ながき　二三三

ま

先たのむ　二一
松しまや　二三六
松原の　二三六

松風に　二四五
舞衣や　一七〇
松風や　一七四
まつ内や　一七五
待花や　一七五
町神樂　一九四
天蓋の　二〇〇
松苗も　二一〇

松葉のこみに　二二四
待かひの　二四七
松ふかき　二五〇

み

明星や　一一九
六月や峯に雲をく　二二四
都人の　二二五
水無月や鯛はあれども　二二七
見にゆかん　二五五
みそ萩や　二六四

見ぞれ酒　一六七
水いはひ　一七四
深山木や　一七六
茗荷たけは　一九六
都人　一九八
水又栗　二〇二
御祐樂や　二二二

硯に高き　四七
身細き太刀の　二六
身はぬれ紙の　二三
彌勒の堂に　二四六

む

むすやうに　二四
むざんやな　二三
むかふ駒の　二六二
むかし匂ふ　一八七
蜉のり　一九七
麥飯や　一九八

め

名月に　七
女夫鹿や　一四

も

もみぢぬと　一六五
藻の花や　一八六
門閉て　二二三
森深く　二二三

門しめて　二三
鵙の一聲　二四八

や

山里は　一八七
山吹の　一九七
宿札に　一九八

（山吹や蛙飛こむ）　二四〇
彌兵衛とは　一四九
藪にすむ　一五二
宿の梅　一八三
山賤の　二〇〇
山寺の　二〇四
破れ葉の　二一〇
山里や　二二三

山風や　一〇九
山はみな　二三七
山ふかみ　二四二
役者四五人　二五二

ゆ

白雨や　三七
行春を　六六
雪の日に　九五
夕すゞみ　一四〇
弓張の　一〇〇

雪ごとに　一三七
ゆかしきや　一三八
夕がほや　一三九
夢となりし　一四二
雪おもしろ　一四三
雪にとへば　一四三
夢猶さむし　一四三
柚の花は　一四八
夕べかな　一四八
夕影や　一四九
雪の冬菜　一五〇
雪の竹子　一五〇

よ

四ツ五器の　一五八
芳野にて　一六〇
世を旅に　一六七
頼朝の　一七二

宵月に　一七五

ら

蘭の香や　一八〇
亂酒の僧　一八三
臘月の　一八四

り

理不盡に　一八八

わ

我跡へ　一八〇
早稲の香や　一九七
わる酒は　一九七
他に絶て　一九一
我笠に　一九九

和歌の奥儀は　二〇八

我乘る駒に　二〇〇
我三代の　二〇五

ゐ

猪に　二〇三
猪の　二〇九

ゑ

越後布か　一六八

を

をとゝ日は　一二五
女とや　一九九
折〳〵や　二〇〇

納本

昭和十四年十一月十日　第一刷發行
昭和二十八年七月五日　第四刷發行

芭蕉俳諧論集
臨時定價百貳拾圓

編者　小宮豐隆　横澤三郎

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎
東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

落丁本・亂丁本はお取替いたします

本製本・表紙・印刷　精興社

讀書子に寄す

――岩波文庫發刊に際して――

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の壁に和して之を揺擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫新刊・近刊書（五月～七月）

既刊二〇〇〇點　戰後復刊一三〇〇點

錦里文集　前編　木下順菴著　木下一雄校譯　★★★★
青春　下　小栗風葉作　★★
對髑髏・艶魔傳　他一篇　幸田露伴著　★
防雪林・不在地主　小林多喜二作　★★
日和下駄　他四篇　永井荷風作　★
良人の自白　中篇　木下尙江作　★★
幼年時代　カロッサ作　齋藤榮治譯　★★
大地　下　エミール・ゾラ作　田邊・河內譯　★★
虐げられた人々　下卷　ドストイエフスキー　小沼文彥譯　★★★★
フィエスコの叛亂　シラー作　野島正城譯　★★
カラクテール　下　ラ・ブリュイエール著　關根秀雄譯　★★
軍隊の服從と偉大　ヴィニー作　三木治譯　★★★
改譯　回想のセザンヌ　エミル・ベルナール著　有島生馬譯　★
千一夜物語　(十)　豐島・佐藤譯　渡邊　★★
浮世のすがた　他六篇　ヴォルテール作　池田薰譯　★★
カザノヴァ回想錄　(三)　岸田國士譯　★★★
アルプスのタルタラン　ドーデー作　畠中敏郎譯　★★
パナーフ文學的回想　第一部　井上滿譯　エ　★★★

文庫定價　昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓　昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

□解說目錄御希望の方は最寄書店にお求め下さい

民主主義展望　ホイットマン著　志賀勝譯　★

ザッフォオ　グリルパルツエル作　實吉捷郎譯　★★

ある女への手紙　下卷　メリメ作　江口清譯　★★★

ジル・ブラース物語（二）　ルサージュ作　杉捷夫譯　★★★

セルバドン・キホーテ　續篇（一）　セルバンテス作　永田寛定譯　★★★

ヴィルヘルム・マイステルの徒弟時代　中　ゲーテ作　小宮豐隆譯　★★★

ウジェニー・グランデ　バルザック作　水野亮譯　★★★

世紀兒の告白　下　ミュッセ作　小松清譯　★★

ここに薔薇ありせば　ヤコブセン作　矢崎源九郎譯　★

資本論（十）　カール・マルクス　エンゲルス編　向坂逸郎譯　★★★

☆近刊☆

良人の自白　後篇　木下尙江作　★★

天路歷程　第二部　バニヤン作　竹友藻風譯　★★★

嘘から出た誠　ワイルド作　岸本一郎譯　★

千一夜物語（十一）　豐島・佐藤譯　渡邊　★★

追憶　下　ゴーリキイ著　湯淺芳子譯　★★

三浦梅園集　三枝博音編　★

夜行巡査・外科室　他五篇　泉鏡花作　★★

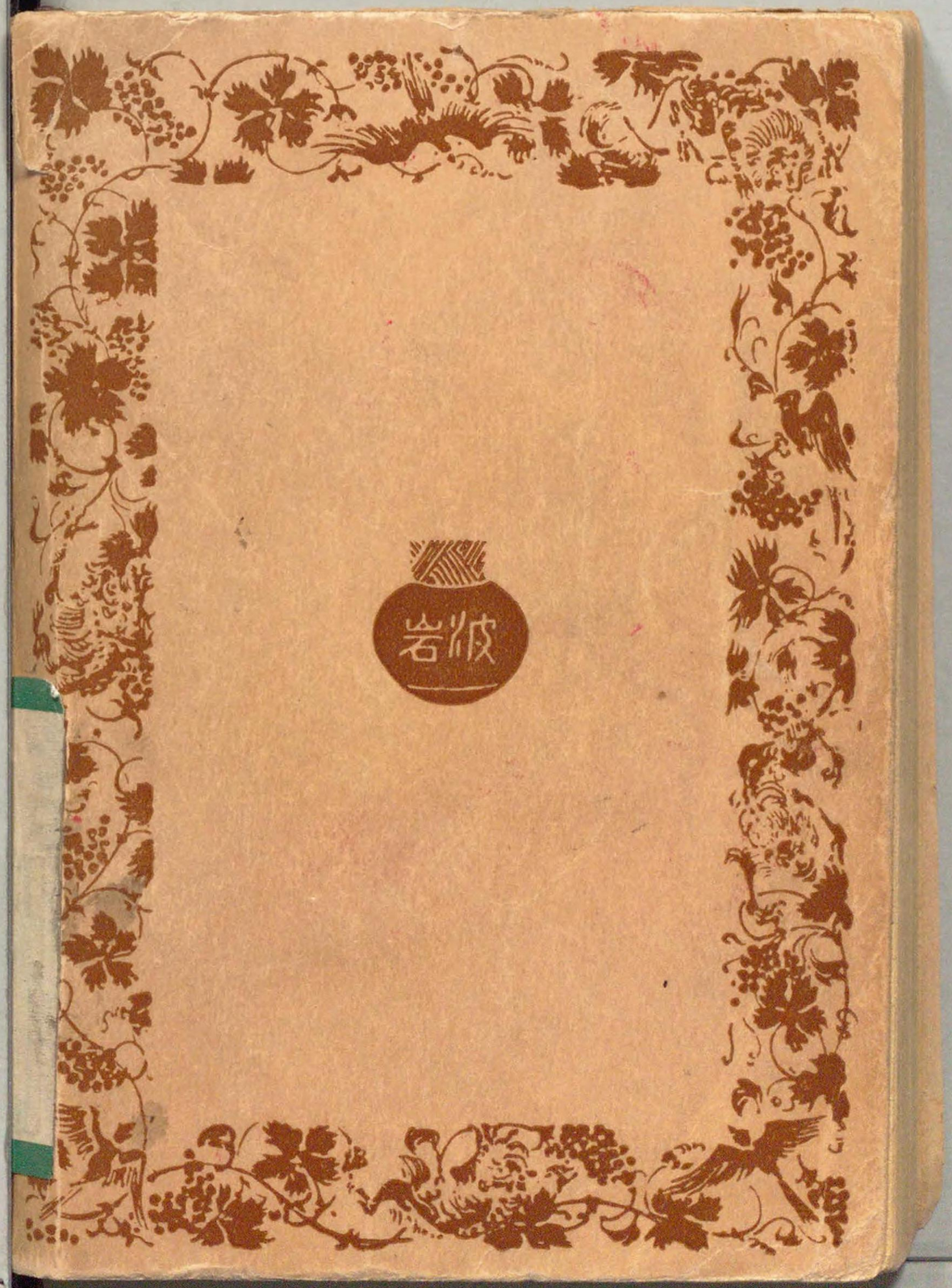
ベルツの日記　第二部上　トク・ベルツ編　菅沼龍太郎譯　★★

ユーデンブーヒェ　ドロステフユルスホフ　番匠谷英一譯　★

カザノヴァ回想錄（四）　岸田國士譯　★★★

サハリン島　下卷　チエーホフ作　中村融譯　★★★

コモン・センス　トーマス・ペイン著　小松春雄譯　★


岩波